

サー・フィリップ・シドニー作 『詩への弁護』¹ (和訳と注解①)

村里 好俊

序 説

誠実有徳なエドワード・ウォトン²卿と小生とが神聖ローマ帝国皇帝マクシミリアン二世陛下の宮廷³にお仕え申し上げた頃のこと、ジョン・ピエトロ・プーリアノ殿のご指導の下、馬術の心得の習得に精を出したことがあった。プーリアノ殿は皇帝陛下の主馬頭^{しゆめのかみ}として誉れ高き御仁であったが、イタリア人の豊穰な知恵に基づいて、巧みな馬術の手本をご披露くださっただけでなく、馬術の原理をも伝授して私たちの精神を高めようとなされた。それこそが最も肝要と、お考えになられてのことである。しかしながら、思い起こすに、いついかなる時にも増して、師の御存念が小生の耳に詰め込まれたことは、(俸給の支払いが遅延していたことに腹立ち紛れか、あるいはお手並みに対する私たち初心者の感嘆に機嫌をよくされたのか)、言葉を尽くして御

1 シドニーの他の著作と同じく、シドニー没後の1595年に出版された彼の詩論には、二種の版本がある。いずれも四折版 quarto だが、William Ponsonby 版は、*The Defence of Poesie*、Henry Olney 版は、*An Apologie for Poetrie* と題されている。既訳の、富原芳彰訳、『詩の弁護』、研究社出版、1968年、前者に拠っている。本訳を作成するに当たっては、Forrest G. Robinson ed. with an Introduction and Notes, *Sir Philip Sidney: An Apology for Poetry*. Indianapolis: The Bobbs-Merrill Company, Inc., 1970 を定本とし、Katherine Duncan-Jones & Jan Van Dorsten eds. *Miscellaneous Prose of Sir Philip Sidney*. Oxford: Clarendon Press, 1973 及び、R. W. Maslen ed., *Sir Philip Sidney: An Apology for Poetry (or The Defence of Poesy)*. Manchester Univ. Press, 2002 を適宜参照した。富原訳と、諸書の注釈には多々教えられた。

2 ウォトン Edward Wotton, first Baron Wotton (1548-1626)。エリザベス女王の信任篤かった廷臣で、外交官として活躍した。シドニーは、ウィーンの神聖ローマ帝国皇帝マクシミリアン二世(在位1564-76)の宮廷で、1574-75年の冬を過ごし、その間にウォトンと親しんだ。その時、ウォトンは26歳、シドニーは20歳であった。1575年5月末、シドニーのイングランドへの帰路の途中、アントワープで二人は再会した。その10年後、ウォトンはシドニーの遺書で指名され、シドニーの葬儀の行列で棺側葬送者を務めた。ウォトンはステュアート王朝になってもジェイムズ一世の宮廷に出仕し、1616年には王室会計局長官になった。

3 シドニーは1572年にエリザベス女王の許可を得て3年余りに及ぶ大陸旅行に立出し、1573年夏にウィーンに到着、そこからイタリアやポーランドに旅行し、1574年秋から翌年春まで再びウィーンに滞在し、皇帝の宮廷に出仕した。

自身のお仕事を自賛されたときをおいてより他になかった。師が力説されるには、兵士は人間の最も高貴な階級であるが、騎手は兵士の中で最高に高貴な者であると。騎手は戦時の達人、平時の花形であり、動いては迅速、守っては強靱、軍営でも宮廷でも功労者である。それどころか、およそ地上にあるもので、良き騎手であることほど素晴らしいことはないと言われ、君主が思い込むのも尤もな事と、信じ難いと思われるまで極言なされた。これに較べれば、政治の技術などは術学⁴を弄ぶに等しいと。その後も誉め言葉を繰り返され、馬がどれほど比類ない動物であるか、阿諛追従を知らぬ唯一の廷臣であり、最も美しく、誠実かつ勇敢などと、止めどなく、まくし立てられた。師にお会いする以前に、いかほどかは論理の心得があったからよかったものの、そうでなければ、私は、危うくも、いっそのこと、馬であったらよかったのにと願うことになりかねなかった。だが、いずれにしても、師が言葉を尽くして私の頭の中に叩き込まれたことがある。それは、自らが携わっていることを豪華絢爛に見せるには、どんな装飾よりも自らの仕事への思い入れに勝るものはないということだ。その点に関して言えば、プーリアノ師の言には、偏見が強いわりに議論の腰が弱く、とても合点が行かないと思われる向きもあろう。そういう向きには、私自身という卑近な例を引き合いに出してみたいと思う。どういう行き違いがあつてか、まだ年端もいかないのに無為の歲月を重ねるうちに、詩人という肩書を引掛けることになった私は⁵、自ら選んだのでもない職業を擁護するため敢えて物申す仕儀と相成った。善意からこの論点を扱うつもりであるから、たとえ理屈は通らなくても、ご容赦いただきたい。師の足跡を辿る弟子は、許されるべし、と言うではないか。とはいえ、ここで言明しておかねばならないのは、学問の領域でほとんど最高と評価された地位から転落して、子どもたちの笑い種^{おとし}にまで貶められた哀れな詩⁶に同情して、ふつつかながら弁護を試みるには大義名分があるという

4 原文はイタリア語の *Pedanteria pedantry, school learning* の意。シドニーは、プーリアノが使った言葉をそのまま用い、彼の軽蔑的口吻を伝えようとしている。

5 シドニーは、恐らく、『詩への弁護』創作に先立つ年に一応の完成を見た『オールド・アーケイディア』を念頭に置いて、こう言っているのであろう。

6 この一節を書くとき、シドニーはステイヴン・ゴッソン *Stephen Gosson* 『悪癖学校』 *The School of Abuse: Containing a Pleasant Invective against Poets, Pipers, Players, Jesters, and Such Like Caterpillars of a Commonwealth* を意識していたと論じられて来たが、「哀れな詩」に対する嘆きの声は、当時のユマニストたちの間で、よく聞かれた。ちなみに、ゴッソンはシドニーと同年の生まれで、オックスフォードに学び、初めは劇（現存しない）を書いたりしていたが、清教徒に転ずるや、その立場に立って、文学や芸術に攻撃を浴びせた。『悪癖学校』は、その攻撃の文章で、1579年8月に出版され、無断でシドニーに献じられた。その中で、彼は「文化に対する清教徒の敵意」を剥き出しにし、主たる攻撃目標として、演劇に的を絞った。その3年前から常設劇場シアター座が建設され、芝居熱が盛んになってきたことに反駁して、劇場こそ国民の質実剛健の精神を崩し、彼らの惰弱、放埒、

ことだ。同時にまた、いくつかのもっと有効な証拠を持ち出す必要もある。馬術の方は、それが当然受けるべき榮譽を阻む者など誰一人いないが、愚直な詩の方は、それを貶めるため哲学者たち⁷の名望さえ利用され、歌神たち⁸の内輪揉めを引き起こす大きな危険性を孕む状況であるからである。

Narration: 詩とは何か

①詩はあらゆる学問に先立つ

実を言うと、学問を標榜しながら、詩をあしざまに罵る全てのの人々に対して、まず初めに、以下のような異議申し立てをするのは、正当なことである。この世にあまねく知られている最も高貴な国民と国語において、無知蒙昧の暗闇に初めて光を与え、最初の乳母として乳を吸ったおかげで、その後もっと生硬な諸知識を徐々に味わえるようになったその大元の顔を潰そうとする、このことは忘恩すれすれの暴挙ではないかと。ねぐらに迎え入れてもらいながら、ねぐらの主人を追い出してしまうハリネズミの役を演じようと、あるいはむしろ、生まれる時に親の腹を突き破り出て、親を殺してしまうマムシの真似をしようというのか⁹。

学芸が咲き誇ったギリシア、そこで隆盛を極めた多岐にわたる学問の中で、誰であれ、正しく詩人に他ならないムサイオス、ホメロス、ヘシオドス¹⁰の三人に先立つ書物を差し出すことができるなら、それを示して欲しい。いや、

淫靡を教える最悪の学校と決め付けた。また、ゴッソンは、論旨を広げて、詩は陰險な嘘に他ならない、プラトンが理想国から詩人を追放したのは尤もなことだと主張した。

7 とくには、彼の理想国から詩人を追放したプラトンを指す。

8 **歌神たち** 天の主神ゼウスと記憶の女神ムネモシユネが9日9夜交わった結果生まれた、学芸を司る九柱の女神たち。カリオペ Calliope (叙事詩)、クリオ Clio (歴史)、エラト Erato (叙情詩)、エウテルペ Euterpe (恋愛詩)、メルボメネ Melpomene (悲劇)、ポリュヒュムニア Polyhymnia (聖歌)、テルプシコレ Terpsichore (舞踊)、タレイア Thalia (喜劇)、ウラニア Urania (天文学)を指す。

9 マムシが生まれてすぐ親を食い殺すことに関しては、プリニウスの『博物誌』にそういう記述があり、初期近代のはじめまでは事実として信じられていたらしい。

10 三名はその作品あるいは作品と言われるものが伝わっているギリシア最古の詩人たち。ムサイオスはホメロス以前の伝説的詩人。トラキアの人で、オルフェウスの弟子であったと言われ、神託の集と「オルフェウス教」Orphism (紀元前6ないし7世紀にオルフェウスを教主として始まった古代ギリシアの秘教。古代ギリシア以前の信仰やトラキア人のザグレウス Zagreus 崇拜などの混合宗教) に関係のある数篇の詩の作者とされている。美しいギリシア語の恋愛詩『ヒアロウとリアンダー』*Hero and Leander* を書いた同名のムサイオスは紀元4世紀あるいは5世紀の人で、別人である。ホメロスは、周知のとおり、伝統的に叙事詩『イリアス』*Iliad* と『オデュッセイア』*Odyssey* の作者とされている詩人。彼の生存の時期については諸説があって一定しないが、ギリシアの歴史家ヘロドトス Herodotus (485?-425?) は彼を紀元前9世紀の人としており、最近の学者たちも大凡そう考えているようである(他に、紀元前12世紀説や7世紀説もある)。ホメロスの生地も定かではなく、シドニーも言うように、多くのギリシアの都市が彼を自国の人にしたがったが、言語的に見て、小

どこの歴史でもよい、詩人たちに先行する作家たちがいたと言っている者がいれば、ここへ連れてきて欲しいものだ。ただし、それがオルフェウス、リノス¹¹と同じ技能の持ち主であってはならないけれど。また、文筆をもって後世におのれの知識を伝える道具としたその国で最初の者であり、その国の学問の祖と呼ばれる権利を正当に主張できる者たちを名指しすることが出来ると言っている者がいれば、お目にかかりたいものだ。彼ら詩人たちは、ただ時間の上でこの優先権を有したのみならず、(古さは、それだけでも畏敬すべき価値ではあるけれど)、原因としても、他の人々を凌駕した。詩人たちは、磁石のごとき甘美さを発揮して野蛮な時代の粗野な人々の心を魅了し、知識を鑽仰するに至らせたからである。例えば、アンフィオン¹²はおのれの詩の力で石を動かしテーベの町を築き、オルフェウスの歌声には、獣たちも、実際、石のように冷徹で獣のように野蛮な輩たちも聞き惚れたと伝わっている。

アジアの西海岸にあったキオス Chios とスミルナ Smyrna とが有力とされている。ただし、そもそもホメロスという個人としての詩人が存在したことを疑う説も一方にある。ヘシオドスは、古代ギリシアの民衆的な詩人。神の正義と労働の重要性を説く教訓叙事詩『仕事と日々』*Works and Days*の作者で、英雄叙事詩を綴ったホメロスと対比される。紀元前8世紀頃、ボイオティア Boeotia で農業を営む。『仕事と日々』は彼の農作業生活から生まれたものだが、その他に、ギリシア語で書かれた最初の宗教的著作の、神々の歴史を語る『神統記』*Theogony* や近年パピルス文書の中から発見された『名婦伝』*Catalogue of Women* も彼の作とされる。

11 オルフェウス、リノス ともに神話的人物。オルフェウスは、オルフェウス教を創始したとされるギリシア神話の英雄。トラキア王オイアグロスと叙事詩の歌神カリオベとの間に生まれた(父はアポロンとも言われる)。9弦竖琴の名手で、野獣や山川木石もその妙音に魅せられた。アルゴ船遠征隊 Argonauts に加わったときには、彼の楽の音で一行を Sirens (水の魔女たち) の危険から救った。ニンフのエウリュディケ Eurydice と結婚し、彼女が新婚間もなく毒蛇に噛まれて死ぬと、死んだ妻を求めて冥府 Hades へ下り、音楽の力で冥府の女王ペルセポネの心を動かし、妻を地上に連れ戻すことを許されたが、現世へ連れ出す途中で妻を決して振り返って見ないという約束を冥府の出口近くで破ったため、ついに永遠に妻を失うことになった。この後彼は冥府での体験に基づき、死後の世界の秘密を入信者に伝授する密儀宗教を創設したが、女性の入信を許さなかったためと、エウリュディケ以外の女性に全く無関心であったため、トラキアの女たちの怒りを買い、殺されて死体を八つ裂きにされ、川に棄てられた。すると彼の頭と竖琴は、海を越えてレスボス島に流れ着き、そこの島民たちに手厚く葬られ、この島に抒情詩の栄える原因になったと伝えられる。リノスは、オルフェウスと並ぶ音楽の名手で、文字の発明者とも伝えられる。ホメロス時代の昔から収穫時に歌われた“Song of Linus”の中でその不慮の死を悼まれる神話的英雄であるが、Linus という名前も古い収穫の歌をあらわすギリシア語と関係があるらしい。歌神の一人ウラニア Urania がアンフィマロス Amphimarus の種によって産んだ子で、音楽にかけてはアポロンより自分の方が優れていると自慢したために、神の怒りに触れて殺された^{とも}、ヘラクレス Hercules の音楽教師となったが、その覚えの悪さに業を煮やしてヘラクレスを打擲した時、彼自身の竖琴で逆にヘラクレスに打ち殺されたとも言われる。

12 アンフィオン 神話的人物。天の主神ゼウスとテーベ Thebes の女アンチオペ Antiope との間に生まれ、生後すぐにキタイロンの山中に棄てられたが、牛飼いに拾われて成人し、母を迫害していたリュコスとその妻ディルケを殺し、弟のゼトス Zethos とともにテーベの支配者となり、7つ

同様に、古代ローマ人の中には、リヴィウス・アンドロニクス、並びにエンニウス¹³がいたし、イタリア語においては、それを高めて学問の宝庫にした最初の人々として、ダンテ、ボッカチオ、ペトラルカ¹⁴の詩人たちがいた。同じく、英語においても、ガワーやチャーサー¹⁵が現れ、彼らの後を襲い、彼らの卓越した手本に励ましと歓びを与えられて、他の人々が陸続と現れ、詩に関しても他の学芸に関しても、母国語である英語を美しく整えて来たのである。

以上のことは隠れもない事実として自明のことであったので、ギリシアの哲学者たちは、詩人という仮面を被らずして、あえて世間に現れるのに、長

の城門を備えたその町の城壁を築いた。彼は堅琴の名手で、彼がそれを奏すると、石はひとりでに動いて城壁をなしたと言う。スカリジエール Scalliger (1484-1558、イタリアの古典学者)は、恐らくホラティウスに従って、アンフィオンとオルフェウスは無生物をも支配する神々しい力に恵まれた宗教的詩人であったと述べている。

13 リヴィウス Livius Andronicus (c. 284-204 B.C.) ローマの劇作家・叙事詩人。元来はタレントム Tarentum にいたギリシア人で、同市の陥落後、272年にローマへ連れて来られ、その後自由の身になった。ホメロスの『オデュッセイア』をラテン語に訳したほか、ギリシア形式の悲劇や喜劇をラテン語で初めて書いた。彼の悲劇のうち少なくとも9篇の題名と、喜劇のうち3篇の断片が現存する。ギリシア文学とローマ文学との最初の接点をなし、ローマ劇と叙事詩の父と言われる。エンニウス Ennius Quintus (239-169 B.C.) 初期ローマ詩人中もっとも偉大かつ多彩な詩人の一人で、ラテン文学の父と言われる。カラブリア Calabria の生まれで、ギリシア語、ラテン語、オスク語を話した。サルディニア Sardinia でローマ軍の百人隊長をしていたとき、その執政官であった大カトー Cato に認められてローマへ連れて来られ、ローマ市民の榮譽を与えられ、ギリシア語の教師となった。大スキピオ Scipio the Elder とも親交を結んだ。代表作は、ローマの歴史を歌ったホメロス風英雄叙事詩『年代記』*Annales* 18巻と悲劇(エウリピデス Euripides からの翻訳『メディア』*Medea*をはじめ、20篇以上の題名と断片とが伝わっている)。他に、雑詩集、警句集、喜劇、ローマ史劇(『サビニ女の略奪』*The Rape of Sabine*)など。

14 ダンテ Dante Alighieri (1265-1321) イタリア、フィレンツェ生まれの中世最大の詩人。瑞々しい恋愛の書『新生』*Vita Nuova*や、宗教的叙事詩『神曲』*Commedia Divina*の作者。ボッカチオ Boccaccio Giovanni (1313-75)『フィロストラート』*Filostrato*や、チャーサーに大きな影響を与えた『デカメロン』*Decameron*の作者。ペトラルカ Francesco Petrarca (1304-74)『抒情恋愛詩集』*Canzoniere*の作者。恋人に人妻となるラウラ Laura を得て、あの世へと旅立った彼女への永遠に叶えられない愛を切々と歌うこの連作ソネット集は、とりわけ、16世紀後半のイングランドで多くの模倣者を生み、多くの詩人たちが様々な趣向を凝らして、決して叶えられない愛をソネットに書き込んだ。1590年代のイングランドでは、数多くの連作ソネット集が連綿と書かれたが、シドニー作『アストロフィルとステラ』は、英語で書かれたソネット連作詩集 sonnet sequence の嚆矢となり、その掉尾を飾るのがやや時期外れではあるが、1609年出版のシェイクスピア作『ソネット集』である。

15 ガワー Gower, John (1330?-1408) 当時はチャーサーと並び称されたイングランドの詩人。『教訓的なガワー』と称され、道徳的社会的改革を促す寓意的で教訓的な詩を多く書いた。社会の悪徳を非難する3万行に及ぶ寓意詩『冥想者の鏡』*Mirour de l'Homme (Speculum Meditantis)*をフランス語で、農民一揆と社会不安を克明に描いた1万行の寓意詩『呼ばれる者の声』*Vox Clamantis*をラテン語で、7つの大罪を例証する恋の物語詩集『恋人の告解』*Confessio Amantis*を英語で書いた。チャーサー Chaucer, Geoffrey (c.1340-1400) 中世イングランド最大の詩人で、『英詩の父』と称される。代表作は『トロイラスとクリセイダ』*Troilus and Criseyde*、『カンタベリー物語』*The Canterbury Tales*。

い時間を要しなかった。かくして、ターレス、エンペドクレス、パルメニデス¹⁶は、彼らの自然哲学を韻文で物した。ピタゴラスやフォキュリデス¹⁷は、彼らの道徳的教を韻文で教示した。テュルタイオス¹⁸は軍事に関して、ソロン¹⁹は政事に関して、同じく韻文で綴った。むしろ、こう言うべきであろう。彼らは、生来、詩人であったがゆえに、彼らが韻文で歌う以前には世の人々に隠蔽されていた知識の、最高に価値のある諸点を伝達すべく、彼らの読者を悦ばす気質を發揮した、と。賢者ソロンが忌憚なく詩人であったことは、失われたアトランティスの島²⁰についての著名な寓話を韻文で綴ったことから明白である。そして、その物語の続きを書いたのが、他ならぬプラトンであった。

実を言えば、そのプラトンだが、彼の著作をよくよく吟味してみれば、誰であろうと分かるはず。彼の著作という肉体の中で、その内側と力は哲学であるが、いわばその皮膚と美はひとえに詩に負っているということが。全て

16 ターレス **Thales** (624?-548/545BC) 小アジアのミレトス **Miletus** に生まれた哲学者。ギリシア 7 賢人 **The Seven Sages** の一人。自然哲学の始祖で、万物の根源を水に求め、他の一切の事物はすべて水より自然的に生ずると説いた。エンペドクレス **Empedocles** (490?-430) シシリー島 **Sicily** に生まれたギリシアの哲学者、自然学者、医者、詩人、予言者。彼はパルメニデスに対抗して多元論の立場を取り、万物は **earth, air, fire, water** の 4 元素より成るとし、その結合分離の原因を **Love** と **Discord** に帰した。詩の形式で書かれた『自然について』、『浄め』があるが、断片のみ。一説によれば、エトナ山 **Mt. Etna** の火山に身を投げて死んだと言う (**Matthew Arnold**, "Empedocles on Etna" を参照)。パルメニデス **Parmenides** (515?-? B.C.) エレア **Elea** に生まれたギリシアの哲学者。エレア学派の祖。『自然』という詩が約 160 行現存。彼は「有るもの」のみがあり、「有らぬもの」はないとの原理に立って、存在の唯一不変を韻文で説いた。存在と非存在、存在と思惟という哲学の重大問題を示唆し、後の認識論、存在論に大きな影響を与えている。

17 ピタゴラス **Pythagoras** (569?-470?) サモス **Samos** に生まれたギリシアの哲学者。オルフェウス教的神秘主義の教団を組織し、「万物は流転する」として一種の輪廻思想を説き、禁欲的訓戒に従うことで魂の牢獄である肉体から浄化されるとし、音階と天文の中に比例と調和を認め、世界の原理を有限と無限とからなる数であるとした。有名な「ピタゴラスの定理」を発見したときには、牡牛 100 頭の犠牲を捧げて神々に感謝したと言う。フォキュリデス **Phocylides** 紀元前 6 世紀に、小アジアのミレトス **Miletus** に生まれたギリシアの教訓詩人。道徳的観察や規範をエレゲイア形式の韻文で書き、農業の賛美、女の悪、家柄の無価値など伝統的なテーマを扱ったが、わずかな断片しか現存しない。

18 テュルタイオス **Tyrtaeus** 紀元前 7 世紀の中ごろにスパルタ **Sparta** に住み、エレゲイア体で書いたギリシアの詩人。伝説によれば、スパルタがメッシナと戦った時、軍歌を書いてスパルタ人を鼓舞し、勝利に導いたとされる。

19 ソロン **Solon** (640?-558? B.C.) アテネ **Athens** の政治家、立法家、詩人。7 賢人の一人。民主的立法を行ない、経済を改めて、アテネの繁栄に貢献した。また、アッティカ **Attica** 最初の詩人で、政治詩その他の断片が伝わっている。

20 のちに水没したとされる架空の理想国アトランティスのこと。プラトン **Plato** の『ティマイオス』**Timaeus** と『クリティアス』**Critias** の中で、エジプトのサイスの僧によって、ヘラクレスの柱、すなわち、ジブラルタル海峡の西方にあり、強大な国家であったが一夜のうちに海中に没したと語られる。

の著作が対話の上に成り立ち、その中でプラトンは、多くの正直なアテネ市民たちに、たとえ拷問台にかけられても、絶対に白状しなかったであろうことを語らせるという虚構を案出している。例えば、宴会の整然とした秩序、散策の精妙な楽しみなど、彼らが出会った時の状況を詩的に描写し、ギュゲスの指輪²¹その他の小話を適所に織り交ぜて興味を増す。その趣向が詩の花々であることに気づかない人は、アポロンの花園に足を踏み入れた²²ことがないのである。

次に歴史家であるが、彼らは口々に過去の事実について語り、「真実」の文字を額に書き記しているが、彼らでさえも、詩人から形式も、恐らくは、実質も喜んで借用して来たのである。そういう次第で、ヘロドトス²³は、彼の『歴史』の各巻を九人の歌神に因んで名づけた。彼も彼の追隨者たちも詩の領野を侵し、熱情を熱っぽく描く術を詩から略奪し、だれも断定できない戦闘の多くの詳細な記述を行った。たとえそうではないと言われても、偉大な王や武将たちが決して口にしたはずがない長い演説を雄弁に語らせているのは、事実なのである。

以上のように、哲学者も歴史家も、もし彼らが詩という偉大な通行手形を所持していなければ、端から民衆の理解の門に入り込めなかったであろう。そのことは、今日でさえ、学問が未発達全ての国々について、明々白々である。そういう未熟な国でも、詩の感覚はある程度漂っているのである。

トルコでは、立法者を兼ねる聖職者を別にすれば、詩人の他に著述する者はいない。隣国のアイルランドでは、実を言うと、学問は目を覆うばかりに貧寒であるが、それでも詩人たちは畏敬の念で崇められている²⁴。西インド

21 ギュゲス Gyges 685B.C. 頃にリュディア Lydia の王位を奪い、約 30 年間王として君臨した。プラトンの『国家』に語られているところによれば、彼はもと羊飼であったが、ある日、深い穴の底で、青銅の馬の中に隠されていた死骸がはめていた金の指輪を得た。これを指にはめると、彼は自由に自分の姿を見えなくすることができた。彼はリュディア王の許へ使いに行ったとき、この指輪を用いて王妃を誘惑することに成功し、彼女の助けを得て王を殺し、王位を自分のものとしたと言う。この思い通りに姿を隠せる指輪を利用して、王国を完全掌握したとも言う。

22 原文は *Walk into Apollo's Garden* 詩を理解して味読することを言う。太陽神アポロン Apollo は、音楽、予言、医術、運動の神であると同時に、詩の守護神である。

23 ヘロドトス Herodotus (c. 480-c. 425 B.C.) 小アジアのハリカルナッソス Halicarnassus に生まれたギリシアの歴史家。先例がない精密正確な歴史記述を称えて、キケロ Cicero その他によって「歴史の父」と呼ばれている。彼の『歴史』は、ペルシア戦争を中心にオリエント諸国とギリシア諸国の歴史を物語ったもの。この書はおそらく未完であり、これを 9 巻に分けてそれぞれの巻に 9 柱の歌神 Muses の名を冠したのはヘロドトス自身ではなく、彼が自作の歴史を朗読するのを聞いた同時代のギリシア人か、のちのアレクサンドリアの編集者たちであったろうと言われる。過去の出来事を実証的学問の対象とした最初のギリシア人で、『歴史』は、ギリシア散文史上最初の傑作とされる。

24 詩人たちの令名を別として、アイルランド人がシドニーに訴えるものがないのは、女王の代理

諸島の原住民は、野蛮極まる単純な人々で、文字さえ持たないが、それでも彼らなりの詩人は存在し、先祖の功業を称え、神々を賛美する、「アレイトス」²⁵と呼ばれる歌を作りかつ歌う。彼らの間に学問が訪れる日がやがて来ることになれば、それは、彼らの固く鈍い頭脳が詩の甘美な悦びによって柔らかくかつ鋭くされた上であると言つて、まず間違いないであろう。精神が自由に働くことに悦びを見出すまでは、多大な知識が約束する偉大な展望をいくら口すっぱく力説しても、知識がもたらす果実を知らない人々を説得することはないからである。ウェールズ、古のブリトン人²⁶の真の残存地には、大家たちの信頼できる証言に拠れば、その昔、「バード *bard*」と呼ばれる詩人たちが存在した。その後、かの地は、ローマ人、サクソン人、デーン人、ノルマン人²⁷に征服され、征服した種族の中にはウェールズの人々の間から学問の記憶を一切合財殲滅せしめようとした者もいたにもかかわらず、かの地の詩人たちは今日まで健在であり、かくして、その起源の古さが誇るに足

として長年アイルランド総督職に在った彼の父と同じく、シドニーはローマ・カトリックを奉じるアイルランド人を無教養な野人と思倣していた。彼は、恐らく、1576年にアイルランドの父の許を訪問している。

25 原文は **Areytos** (or *areitos*) [スペイン語 *areito* の複数形] アメリカ・インディアン^のの歌に合わせての儀式的な踊り。シドニーは、インディアンの言葉がスペイン語に入った形を用いている。シドニーがこの情報を得たのは、Richard Eden, *Hystorie of the West Indies* (1555) 所収の、Peter Martyr, *Decades* 経由とされる。

26 古のブリトン人 紀元前6世紀の頃、中央ヨーロッパ方面から移動して来てブリテン島に定住したケルト系の種族。古代ローマ人によりブリタニ（入墨を施した者）と呼ばれたが、当時対岸の北ガリアに居住したブリタニと混同され、ブリタニ（ブリトン人）と呼ばれるに至った。1世紀以降ローマに征服され、5世紀半ば以降、ブリテン島に侵入して来たゲルマン系の種族アングロ・サクソン・ジュート *Angles, Saxons, Jutes*（後に、アングロ・サクソン人と総称）に追われてイングランドの中央から退き、ウェールズをはじめ、コーンウォールやアイルランド、スコットランドに逃げた。伝説上では、トロイの武将アエネアスの曾孫、ブルート *Brut* (*Brutus*) がトロイアの一族と共にブリテン島に渡り、ブリトン族の創始者としてトリノヴァント *Trinovant* を建設したとする民衆的観念が16世紀にもなお広く流布していた。ウェールズの聖職者・年代記作家モンマスのジェフリ *Geoffrey of Monmouth* (1100?-54) は、『ブリテン列王史』*Historia Regum Britanniae* で、その伝説の先鞭を付け、アーサー王伝説など、中世ロマンス作品の豊かな材源となった。スペンサー『妖精の女王』2巻、10篇、9連をも参照。

27 **ローマ人** ブリトン人 *Britons* の国ブリタニア *Britannia* は紀元前55年にユリウス・カエサル *Julius Caesar* の率いるローマ軍の侵入を受け、以後ローマ領となった。ローマのブリタニア支配はアングロ・サクソン人のブリテン島への侵入がはじまる5世紀の初め頃までつづいた。**デーン人** *Danes* 8世紀の末ごろから約200年間にわたってブリテン島に侵入したゲルマン系の種族。ヴァイキング族 *Vikings* とも呼ばれる。**ノルマン人** *Norman* ゲルマン民族の大移動に従ってフランスの北西部ノルマンディ地方 *Normandy* に侵入し、そこに定住した「北方人」で、デーン人 *Danes* の一派。彼らは、1066年、ノルマンディ公ウィリアム *William* に率いられてブリテン島に侵入し、これを征服した。ウィリアムはイングランド王 *William I* となり、通常、ウィリアム征服王 *William the Conqueror* と呼ばれている。

るのと同様に、長い持続も注目に値するのである。

とはいえ、今日の学問知識の大半の創始者はローマ人であり、それ以前にはギリシア人であったがゆえに、暫時、ローマの権威を考察の対象とするが、しかし、ここでは、今日軽蔑されている当の技能にローマ人がどのような名称を与えていたのかを指摘する程度にとどめたい。

② 予言者としての詩人

ローマ人の間では、詩人は「ヴァテス vates」と呼ばれ、「ヴィティキニウム vaticinium」や「ヴァティキナリー vaticinari」というこの語を含む合成語を見れば明らかであるように、占い師、先見者、あるいは予言者ほどの意味である。それほど天上的なことと関わる称号を、あの卓越した国民は、この心を強奪しうっとりさせるような知識に授けたのである。そして、それへの感嘆の想いに強く誘われて、何らかのそのような詩句にたまたま思い当たる偶然に恵まれることに中に、彼らのこれからの運命の偉大な予兆が孕まれているのではと考え、それを基にして、「ウエルギリウス占い」²⁸という言葉が生まれた。その方法はと言えば、唐突にウエルギリウスの本を開いて、ふと目に止まった彼の詩句で占うというもので、【多々伝わる場所に拠れば】、ローマ皇帝たちの伝記にその例はいくらでも見られる。一例として挙げれば、私たちのこのブリテン島の総督を務めたアルビヌス²⁹は、子供の頃、「狂熱に憑かれて私は武器を取った、武器を取ることに理はなかったが」³⁰という詩句に出会い、年月を重ねた後、それを実行に移した。この顛末は、実に空しい神不在の迷信に他ならない。ちょうど、精霊たちがそのような詩句によって自在に操られる——それがラテン語の「カルミナ carmina」（吟唱）に由来して、英語の「チャーム charm」（呪文）が生まれた所以であるが——と夢想することがまた迷信であるように。とはいえ、このことは、それらの賢者たちが絶大な尊敬に包まれていたことを証明するには役に立つし、デルフォ

28 原文は *Sortes Virgilianae* “Virgilian Oracles”. ウェルギリウス Virgil の本を随意に開き、最初に目にとまった詩句で未来を占うこと。清教徒革命中にチャールズ一世 Charles I もこの方法で自分の運勢を占ったという話がある。ウェルギリウスをふしぎな力を持った魔術師とする考え方は、彼の死後間もなく生じ、西洋に永く残った。なお、同種の占いはホメロスや聖書を用いても行われた。

29 アルビオス *Albinus, Clodius*, ローマの軍人で、ブリタニア *Britannia* 駐在のローマ軍の司令官であり、総督 (192-197) であった。生来、攻撃的な性格で、皇帝の権力を欲しがり、幼き日の予徴に唆され、軍隊の力を誇示して皇帝を僭称し、ローマへ進軍したが、197年の戦いに敗れ討ち死にした。

30 ウェルギリウス『アエネーイス』Virgil, *Aeneid* 第2歌314行。ギリシア軍が深夜突如トロイに攻め込んだことを知ったときのアエネーアスの周章狼狽を、彼自らが語っている箇所。上述の通り、アルビヌスは皇帝セプティマス・セヴェルス *Septimus Severus* に対して反軍を起こし、197年に戦死したので、このときの占いが適中したというわけ。

イの託宣やシビルの予言³¹がいずれも丸ごと韻文で伝授されたことからして、あながち根拠のないことではない。言葉における韻律を丁寧^{ていねい}に数え、長短の音節を精巧に整えること、かつまた、詩人に固有の自由な想像の翼を天高く天翔けさせること、そこには何か神々しい力が秘められていると思われたのである。

ならば、もう少し踏み込んで、「ヴァテス」という言葉の整合性を論証し、聖なるダビデの「詩篇」³²もまた神の靈感に与る詩であると言えないであろうか。古今の碩学たちの証言を得ないまま、そういう大胆な発言をしているのではない。まさしく「詩篇」という名称それ自体が私のために弁じてくれている。「詩篇」³³とは、訳すと、「歌」に他ならないからだ。すべての学識あるヘブライ学者が同意しているように、それは十分に整った韻律で書かれている。ただ、韻律の法則はまだ充分には究められていないが。最後の、そして決め手となる理由として、ダビデによる予言の扱い方が挙げられるが、これは完璧なまでに詩的である。神がかりの作詩術でなければ、いったい何だというのか。彼の楽器を目覚めさせ、対話の中でしばしば自由に語り手を交替させ、見事な擬人法³⁴を巧みに操作して神が荘厳な姿で立ち現れる様を鮮やかに描き、獣たちが喜びに溢れ、丘が跳び踊る様を語ることは。そのとき実に彼は、信仰によってのみ研ぎ澄まされた心眼に映る³⁵、あの得も言われぬ永遠不変の美の熱烈な賛仰者として現れる。ダビデの名を出してしまっ

31 デルフォイの託宣 ギリシア、パルナッソス山 Parnassus 南西麓のデルフォイ Delphi にあった Apollo の神殿で、人々に授けられた託宣。この場所は地球の中心と考えられ、半円形の石の祭壇 Omphalos が置かれていた。託宣として、神殿内の三脚台 tripod の上に坐った巫女が請願者の質問に答えて恍惚として口走る言葉を、かたわらの僧侶が解釈し、韻文（通常は hexameters）にして伝えた。シドニーは『アーケイディア』で、この託宣を物語の軸として利用している。シビュラの予言 Sibylla は Sibyl のラテン形。Sibyl は予言の神（通常はアポロン）に仕え、その神から靈感を受けて予言した巫女のたぐい。彼女たちの予言を集めた *The Sibylline Books* なるものがローマに伝わり、国家的災害や凶事が起こったときに神々の不興をなだめる手段を探すためにこれが用いられたことがしばしばローマ史に見える。Sibyl たちの予言も、通常、ギリシア語の hexameter で書かれていた。

32 聖なるダビデの「詩篇」ダビデ David は、バビロニア人の巨人ゴリアテ Goliath を殺し、サウルの跡を継ぎ国都をイスラエルに定めて、紀元前約 1000 年頃の約 40 年間イスラエル二代目の王として君臨した。旧約聖書中の「詩篇」*The Psalms* は彼の作と信じられていた。シドニーは、妹メアリと協力し、多様な韻律を駆使して、「詩篇」の英訳を試みている。Hannibal Hamlin et al. eds. *The Sidney Psalter: The Psalms of Sir Philip and Mary Sidney*, Oxford Univ. Press, 2009 参照。

33 ギリシア語 psalmos は「堅琴 harp に合わせて歌う歌」の意味である。（更に、それは絃などを「はじく」という意味の動詞 psallein に由来する。）

34 原文はギリシア語の *prosopopocias*。"personification" の意。無生物や抽象物に人間的特性が授けられる技法のこと。

35 信仰が内的視力を研ぎ澄ましてくれるという考え方は、中世以来のキリスト教信仰で常識的なことであった。

た今になって気がかりなのは、私たちの間ですっかり地に落ちて笑い種となっている詩にその聖なる名を結びつけ、それを冒瀆しているように思われはしないかということだ。しかし、冷静沈着な判断力を携え、詩とは何かをもう少し深く掘り下げて直視しようとする者は、詩の目的と機能とは、正しく利用される限り、神の教会から鞭を使って追い立てられる謂れないものであると認知するに至るであろう。

③詩人=作る人

さて、ギリシア人が「それ³⁶」を何と名づけ、「それ」をどう考えていたかを検討してみよう。ギリシア人は「その者」を「詩人 *poieten*」と呼び、その名は、もっとも優れた呼び名として、他の諸国語にも取り入れられた。それは「作る」という意味の「ポイエイン *poiein*」に由来する。その点において、たまたまか叡智の賜物かは知らないが、私たちも母国語で彼を「作る人 *maker*」³⁷と呼んでおり、ギリシア人と足並みを揃えている。その呼び名がどれほど高く比類のない称号であるか、手前勝手な偏見と受け取られかねない私見を言い立てるよりは、他の諸学芸の範囲を特徴づけることで認識したほうが望ましいであろう。

④芸術と自然

人類に授けられた学芸で、自然が作った作品をその主たる対象と定めていないものはない。自然が生んだ作品がなければ、どんな学芸も存在せず、かつまたそれに強く依存し、自然が披露しようとしていることの謂わば演技者、演奏者になっている。例えば、天文学者は星々を凝視し、その眼に映ずる様子から判断して、自然がそれらの中にもどのような秩序を設定しているかを見定める。幾何学者や数学者は、彼らが実施する様々な数量計算において、それと同じことをする。音楽家は拍子について、本来的に一致するものと一致しないものを教える。自然哲学者は文字通り自然に依拠することでその名を得ているし、道徳哲学者は人間の自然の美德、悪徳、あるいは喜怒哀楽の情に関わり、万事において自然に従えば、過つことあやまはないと断言する。法律家は人々が何を定めたか、歴史家は人々が何をなしたかを述べる。文法家はおそらく言語の規則のみを話題にし、修辞学者や論理学者は自然において何が最も迅速に物事を証明し説得するかを考察し、それに基づいて一般的な規

36 原文のこの箇所は、「それ *it*」、「その者 *him*」という代名詞を用いて、シドニーは意図的に曖昧に書いている。また、彼は“*poetry*”と“*poesy*”を区別し、前者は「詩人が芸の限りを尽くして完成した作品自体」、後者は「詩作の技法・技術」としている。

37 作る人 *Maker* 中世の大詩人チョーサーの頃から「詩人」の意味に使われた。シドニーは、恐らく、イタリアの古典学者スカリジェールに従って、この考え方を披露している。

則を生み出す。しかしそのような規則は、議論的となっている問題に応じて、その問題の周りを堂々巡りするだけで規則の適用は常に限られている。医学者は人間の身体の自然的性質、そして身体に対して有益な事物、有害な事物の自然的性質を考量する。形而上学者にとって、自然は二次的抽象的諸概念として存在し、それゆえ物質的世界の外にあり超自然的と見なされるが、それでも彼は、実際には、自然の深奥に基づいて抽象的思考を築いている。

ただひとり詩人だけは、そのようないかなる隷従的狀況に縛られることを嫌って、自らの創意工夫の活力によって舞い上がり、事実上もうひとつの自然と化し、事物を自然が産み出すよりもいっそう見事に造り、あるいは、自然の中にはかつて存在しなかったような形象、例えば、英雄、半神、一つ目の巨人キュクロプス、獅子の頭、山羊の体と龍の尾を持ち、口から火を吐く怪獣キメラ、復讐の三女神³⁸その他を、まったく新たに創造するのである。そうして詩人は、自然の女神と手に手を取って歩き、自然の女神の贈り物という狭い範囲に限定されることなく、彼自身の知性の十二宮中を思う存分駆け廻る³⁹。

自然の女神は、様々な詩人たちが織り成したほどに壮麗な綴れ織りにしてこの大地を装ったことはないし、その織物を彩る、それほどにも楽しい川も、実り豊かな樹木も、甘い香りの花々も、その他、このあまりにも愛され慈しまれている大地⁴⁰をますます愛すべく豊麗なものにする何にせよ、現実の自然の中には存在しない。彼女、自然の世界は青銅、詩人たちが黄金の世界を産み出すのである。

ところで、それらの事物はさておき、人間を話題として取り上げてみよう。他の事物が人間のために存在しているように、人間を造るために自然の女神は最高の技術を駆使しているように思われるが、彼女の技量をもってしても、

38 英雄 Heroes とは、両親のうち一人が神か女神の、神話や伝説に出る超人たちのこと。半神 Demigods 神と人間との中間の存在。あるいは、下級の神々。キュクロプス Cyclops (複数形 cyclopes [saikl6upi:z]) ホメロスなどに出る一つ目の巨人族の一人。シドニーは複数の意味に使っているかも知れない。キメラ Chimeras ライオンの頭、山羊の胴、蛇の尾を持ち、口から火を吐く怪獣。復讐の三女神 Furies アレクト、メガエラ、ティシフォネという三人姉妹の復讐の女神たちで、その髪の毛はうごめく蛇であった。ギリシア語名 Erinyes、敬遠して Eumenides (「親切な人たち」の意)とも呼ぶ。

39 シドニーの主張は、シェイクスピア『夏の夜の夢』5 幕 1 場 12-17 行、シーシェウス公の台詞に類似している。「詩人の目は、恍惚とした熱狂のうちに飛び回り、／天より大地を見わたし、大地より天を仰ぐ。／そして想像力がいまだ人に知られざるものを／思い描くままに、詩人のペンはそれらのものに／たしかな形を与え、ありもせぬ空なる無に／それぞれの存在の場と名前を授けるのだ」(小田島雄志訳)。

40 原文は *The too much loved earth* シドニーにおける地上的なるものへの愛と天上的なるものへの愛との相克(ルネサンスの一様相)を暗示する一句。

テアゲネス⁴¹のごとき誠実な恋人を、ピュラデス⁴²のごとき志操堅固な友を、オルランド⁴³のごとき勇猛な士を、クセノフォンのキュロス⁴⁴のごとき本物の君主を、ウェルギルウスのアエネーアス⁴⁵のごときあらゆる点で卓越した男を、産み出したことがあったかどうか、しかと考察してみよう。自然の女神の作品は実体であり、詩人の作品は模造あるいは虚構であると言って、論者の主張を馬鹿馬鹿しいと一蹴してはならない。知力のある人なら誰しも分かっているはず。名匠の技量は、作品の「心的画像⁴⁶」、ないしは「前概念⁴⁷」に基づくもので、作品それ自体にではないということ。そして、詩人がその「心的画像」を確かに所有していることは、彼が脳裏に想像したとおりに、卓越した技巧でそれらを描出するのを見れば、明々白々である。詩人の描出の仕方に関してもまた、白日夢の中で空中に楼阁を築く人々などとよく口に

41 テアゲネス ヘリオドロス Heliodorus (3世紀ギリシアの恋愛物語作者で、シリアのエメサ生まれ)の『エチオピア物語』*Aethiopica* (あるいは *Theagenes and Chariclea*) におけるカリクレイア姫 Chariclea の恋人。この古代ロマンスはルネサンス期に愛読された恋物語の一つであり、シドニーの『アーケイディア』にも影響を与えた。

42 ピュラデス Pylades オレステス Orestes の親友で、アガメムノンを殺害した妻のクリュタイムネストラと愛人のアエギストスとに対するオレステスの復讐を助け、エレクトラと結婚する。

43 オルランド Orlando イタリアの詩人アリオスト Ariosto のロマンス的叙事詩『狂えるオルランド』*Orlando Furioso* (1516年初版)の主人公である騎士。この作品は『恋するオルランド』の続編として構想され、愛するアンジェリカがムーア人の若者メドロと結ばれたことを知って狂気に陥ったオルランドは、騎士としての務めを忘れるが、最後には失った正気を取り戻し、サラセンの武将アグラマントを討ち果たす。オルランドはローラン Roland のイタリア名。

44 クセノフォン Xenophon (434?-355? B.C.) は、ギリシアの軍人、歴史家、ソクラテスの弟子。ギリシア傭兵軍に加わってペルシアの内乱に参戦。指揮官を失った時に、彼が指導者に選ばれて1万人のギリシア軍をバビロンに近い砂漠の中から黒海南岸まで退却させた功績は、『アナバシス』*Anabasis* に詳しい。他に『ソクラテスの弁明』、『キュロスの教育』など。その文体は、古典期ギリシア散文の典範とされる。キュロス Cyrus は、アケメネス朝ペルシア帝国の太祖 Cyrus the Great (?-529B.C.) のこと。国の内外をあげて理想的君主として崇められ、とりわけ、ルネサンス期のユマニストたちにとっては、寛容高潔な支配者の鑑として尊敬され、多大の影響を及ぼした。彼によってバビロンに幽閉されていたイスラエル民族が解放されたことは有名。W・Barker によるクセノフォン『キュロス王の教育』の英訳 *The Books of Xenophon Containing the Discipline and Education of Cyrus* が 1560 年に出版された。

45 アエネーアス Aeneas ウェルギルウスの英雄叙事詩『アエネーイス』*Aeneid* の主人公。トロイの王族カピュスの息子アンキセスと美と愛の女神ヴィーナスの子。トロイ落城後、西方に新しい国を築こうと地中海の各地を放浪し、カルタゴ女王ダイドーとの悲恋の後、イタリア半島に漂着。その地での激闘の末、ラチウムに足場を固め、ローマ建国の祖となつたとされる英雄。ウェルギルウスは、善き為政者像と高潔な人物像とを合体させて、アエネーアスに描き込んでいる。

46 原文は *Idea* 「着想・意匠、実現されるべきあるいは目的とされるべき標準・原理の概念、望ましいあるいはあるべき事柄の概念」のこと。

47 原文は *fore-conceit* “original conception, first imagining” の意。「表現が与えられる前に心に現存する物事の前概念」のこと。ここでシドニーが言わんとすることは、芸術家を偉大にするものは彼の想像力であって技巧ではないということ。

されるけれど、決してそのようなただ想像の世界にのみ当てはまるものではなく、それは極めて実質的に働く。詩人は、自然の女神ならば出来たかも知れないように、ある特定の傑出した人物あったに過ぎない一人のキュロスを造るだけでなく、数多くのキュロスを産み出しうるように、世界に一人のキュロスを模範として授ける。もしその作者クセノフォンが彼のキュロスを、なぜに、またいかに作ったかを、人々が正しく学ぼうという意志があるならばだが。

それに加えて、人間の知性の最高点と自然の女神の造化力とを比較考量することを、厚かましく生意気なことと見なしてはならない。むしろ、地上の作り手である詩人を天上にて創作し給うた主なる神にしかるべき敬意を払うべきである。創造主は、人間を御自身の似姿に御造りになり、第二の自然、人間が原罪を犯して後の不完全な世界が産み出したあらゆる作品に優り超えるものとされた。そのことは、何にも増して詩において明瞭に示され、詩人は神々しい息吹の力に恵まれ、自然が為すことを遥かに凌いで諸事を産み出すのである。この一件が、アダムのあの最初の呪われた墮罪を信じようとする人々には、少なからぬ反証となるその訳はといえば、神の息吹の力で正しく直立した私たちの知性は、完璧とは何なのかを私たちに知らしめる一方で、私たちの穢れた我意は、私たちがそこへ至る道を阻むからである⁴⁸。とはいえ、これらの議論を理解しようとする者は少なく、是認する者はいっそう少ないであろう。ただし、これだけは認めてほしい。ギリシア人が詩人にあらゆる学問の名前に優る名前を与えたのは、しかるべき理由があつてのことだったということは。

さて、詩人を解明するにあたって、もっと直截な親しみのある冒頭陳述に赴くことにしたい。事の真相がいっそう明々白々になることを祈つてのことだ。彼の種々の呼び名の語源が叶えてくれるほどの、比類のない賞賛は得るべくもないけれど、何人たりと否定しないであろう詩人とは何かの、微細にわたる真の姿の記述を最高の推薦理由から外してしまうと、それはさすがに正しいとは言えないのではないか。

48 正しく直立した知性、穢れた我意 **Our erected wit, our infected will** 詩人の果すべき役割に関するシドニーの中心的な考えは、詩人はただ教えるだけでなく、読者の心を動かして、教えられたことを掻き抱くようにさせることであるというものだ。なお、人間における理性 **reason** と激情 **passion** とのこの対立に関連して、シドニーの連作ソネット詩集『アストロフィルとステラ』5番そのほかが参照に価する。

Proposition: 発議

詩の定義

ありていに言うと、詩は、従って、模倣の技術である。アリストテレスが「ミメシス *mimesis*」という言葉で定義しているように、何かの再現、模造、あるいは描出であり、比喩的にいうと、教えかつ楽しませるといった目的を持った〈物言う絵〉なのである⁴⁹。

Divisions: 区分

三種類の詩

詩の実践の仕方には、従来、三種類が存在した。古き由緒において、かつまた秀逸において、その筆頭に來る者は、神の言語を絶する卓越を模倣した人々であった。そのような人々とは、「詩篇」におけるダビデ、「雅歌」における、また「伝道の書」や「箴言」におけるソロモン、各々の賛美歌におけるモーゼとデボラ⁵⁰、そして「ヨブ記」の作者である。その他と並んで、これらの作品を、学識の誉れ高いエマニュエル・トレメリウスやフランキクス・ユニウス⁵¹は、『聖書』の詩的部分と特称している。聖霊を敬虔に崇敬している者であればだれ一人、これらに対して異議を唱えることはないはずだ。この部類の中に、全く異なる宗教においてではあるが、オルフェウス、アン

49 「模倣」*imitation*という言葉は、この文脈では誤解を招くかもしれない。外的事物の精確な模写という意味で理解されかねないからだ。この混同は、シドニーが「詩は絵のごとく」*ut pictura poesis*の伝統に言及することで、いつそう強められてしまう。その伝統は、詩と絵画は姉妹芸術として、同じく自然の事物を逼真的に描き出すことを示唆しているからだ。しかしながら、「物言う絵」という表現でシドニーが意図していることは、詩とは、言語という媒介物（「語る」）を介して提示される一般的普遍的な概念（心眼に写る「絵」）であるということだ。詩人は、「第二の自然」である青銅の世界ではなく、己自身の「心的画像あるいは前概念」を模倣するのである。

50 **ソロモン Solomon** イスラエル統一王国3代目の王（在位961-922B.C.）。ダビデ王の末子として生まれたが、預言者ナタン、祭司ザドク、ベナヤ、バテシバラが彼を擁立し、兄アドニヤに代って王位を継承、一族郎党で政権を固め、内外の王や貴族の娘を娶り、合計700人の妻と300人の妾がいたと言う。王国の経済的・文化的繁栄を築き上げ、壮大なエルサレム神殿を建て、首都エルサレムを古代イスラエル宗教の中心とした。盛んに国際交流を図る一方で、国内では中央集権的絶対王政の確立を目指した。旧約聖書における知恵文学の多く（「箴言」、「詩篇」、「伝道の書」）が彼の作とされている。しかし、王国の繁栄と権力の強化のため、重税と徴用によって国民を疲弊させ、またその積極的外交策の一環として政略的国際結婚を盛んにしたことが仇になり、異教が導入されたため、彼の死後、王国は分裂した。**デボラ Deborah** イスラエル人の解放に尽くした女予言者（「士師記」4-5章）。

51 **ユニウス Franciscus Junius** (1545-1602) はフランスの新教徒で、ドイツの諸大学で神学を講じた人。ハイデルベルク Heidelberg に滞在中、同じく新教主義の神学者であり、彼の岳父でもあった**トレメリウス Emanuel Tremellius** (1510-1580) を助けて、二人で旧約聖書の新ラテン語訳(1579年)を作った。

フィオン、「神々の讃歌」におけるホメロス⁵²、その他数多くのギリシア人、ローマ人が含まれる。この種の詩歌は、聖ヤコブの助言に従って⁵³、お祭り気分の時には聖歌を歌わんとする者であればだれでも利用しなければならない。それに加えて、私は知っているが、死を招く罪業の苦悶に悶え悲しむときにその歌を利用し、決して消え去ることのない善の慰安を見出して安心立命の境地を得る者もいる。

第二の種類は、哲学的な事柄を扱う人々の手になるものだ。テュルタイオス、フォキユリデス、カトー⁵⁴のように道徳に関する詩、ルクレティウス⁵⁵、そしてウェリギリウスの『農耕詩』⁵⁶のような自然に関する詩、あるいは、マニリウスやポンタヌス⁵⁷のような天文学に関する詩、ルカーヌス⁵⁸のような歴史に関する詩もある。これらの詩を嫌う者がいれば、その咎は、味覚にまったく欠けている彼らの判断力に帰せしめられるのであり、甘美に語られた知識という甘美な食物にはではない。

とはいえ、この第二の種類は、特定の主題という固い布でぐるぐる巻きに包み込まれて、作者自身の創意発案という進路を取るわけではないので、

52 33 篇 22 柱の神々に捧げられた讃歌集だが、実際には、作者不詳。17 世紀初頭に、ジョージ・チャップマンの英訳が出た。日本語訳は、杏掛良彦訳、ちくま学芸文庫。

53 新約聖書中の「ヤコブ書」*The General Epistle of James* 5 章 13 節の次の言葉を指す。“Is any among you afflicted? Let him pray. Is any merry? Let him sing psalms.”（汝等のうち苦しむ者あるか、その人、祈せよ。喜ぶ者あるか、その人、讃美せよ。）

54 カトー *Dionysius Cato* 3-4 世紀ローマの作家。強弱弱格六歩格からなる教訓的ラテン詩を集めた “*Dionysii Catonis Disticha de Moribus ad Filium*” の作者と言われる。彼の道徳的格言は中世においてよく知られていたものであり、エラスムス *Erasmus* もそれらを学校教科書に編集した。

55 ルクレティウス *Lucretius, Carus* (96?-55?B.C.) ローマの哲学的詩人。『事物の本性について』*De Rerum Natura* 6 卷の著者。この書はエピクロス派 *Epicurus* や原子論の哲学に基づいて物理、心理、倫理を叙述した教訓詩で、*hexameter* で書かれている。ウェリギリウスの偉大な先駆であり、その後のローマの思想界に与えた影響は大きい。Stephen Greenblatt, *The Swerve: How the Renaissance Began* (London: The Bodley Head, 2011) を参照。

56 『農耕詩』*Georgics Hexameter* で書かれたウェリギリウスの教訓叙事詩 4 卷本。37-30 BC にカンパーニヤで書かれた。農事を歌いながら、そこに自然観察、人事と自然との交渉、神話伝説への言及を含む。宮廷文学サークルのパトロンであったマエケナスの指示により、国土への愛と農事への尊敬の念を呼び覚ますために書かれたと言われる。

57 マニリウス *Manilius Marcus*。Manlius あるいは Mallius と呼ばれることもある。おそらく Augustus 時代の人といわれるローマの詩人。*Hexameter* で書かれた 5 卷本『天文学』*Astronomica* の著者。ポンタヌス *Pontanus, Jovianus* (1426-1503) イタリアの人文学者・詩人・政治家。イタリア名は Giovanni Pontano。ナポリ Naples でアラゴン王家に仕え、学芸と政治の両面で活躍した。ナポリ・アカデミー *Neapolitan Academy* の創設者。彼の著作（すべてラテン語）は広汎に及ぶが、その中に *Urania* という天文詩、抒情詩 *Lepidina* (1496) がある。

58 ルカーヌス *Lucan, Marcus Annaeus* (39-65) スペイン生まれで、皇帝ネロ時代のローマの詩人。セネカ *Seneca* の甥。ポンペイとカエサルとの争いから起こったローマの内乱を *hexameter* で歌った歴史的叙事詩『ファルサリア』*Pharsalia* 10 卷の著者。

彼らが言葉の本来の意味で詩人であるか否かは、詭弁を弄する文法家（口うるさい術学者）たちの議論に任せておいて、第三の、真に正当な詩人とは何かという議論に赴くことにしたい。現下の問題は、主として、この人々に関わっているからだ。真に正当な詩人と第二の種類の詩人との間には、目の前に置かれた顔をひたすら模写するだけの低級な写実に徹する画家と、知性のほかには法を持たず、目で見るのに最適のもの、例えば、他人が犯した罪を己が身に罰した時の、ルクレティア⁵⁹の悲嘆に暮れてはいるが志操堅固な表情を、色彩をつけて描き出す秀逸な画家との違いに匹敵する相違が見られる。最良の詩人は、彼が見たこともないルクレティアを描くのではなく、そのような美德の外面の美を描く卓越した画家に似ている。これら第三種の詩人たちこそ、言葉の最も本来的な意味で、教えかつ楽しませるために模倣する人々である。彼らは模倣のために、現に存在するもの、過去に存在したもの、将来に存在するであろうもの、これらから何一つ借用することはせず、もっぱら思慮深い博識の手綱に導かれて、存在しうるもの、存在すべきものに関して神のごとき深慮に達しようとする⁶⁰。彼らこそ、第一種の最も高貴な人々と同じく、言葉の正しい意味で、「ヴァテス」と呼ばれてしかるべきである。このように彼らは、最も秀でた言語において、そして最高の理解力に恵まれた人々の間で、先ほど述べたような意味の「詩人（作る人）」という名称を授与され、高い誉れに浴しているのである。これらの人々は、もっぱら模倣するためにのみ創作し、楽しませかつ教えるために模倣し、人々の心を動かして、楽しみがなければ、見知らない他人から逃げ出すみたいに、人々がそこから逃げ出してしまふ善を手中に捉えさせるために楽しませ、人々が心を動かされて至る、その善を人々に認識させるために教える。この方法こそ、これまであらゆる学問が目指した最も気高い目標であるにもかかわらず、減

59 ルクレティア *Lucretia* 紀元前6世紀のローマの貞女。貞節の鑑と評される彼女は、*Tarquinius Colatinus* の妻であったが、一族の男たちが戦時に借り出され留守中の一夜、時の権力者 *Tarquinius Superbus* の息子 *Sextus Tarquinius* によって凌辱され、このことを彼女の手紙によって急遽帰宅した夫と父に告げたのち、自害して果てた。この事件から *Lucius Brutus* を指導者とする反乱が起こり、*Tarquinius* 王家はローマから追放され、ローマは共和制に移った。彼女のことは英文学でも、チョーサー『善女伝説』*The Legend of Good Women*、ガワー『恋する男の告解』*Confessio Amantis*、シェイクスピア『ルークリースの凌辱』*The Rape of Lucrece* などで歌われている。

60 シドニーの主張の最も重要な古典的先例は、アリストテレス『詩学』第25章に見られる。ここで、詩人は、肖像画家と同じように、模範・手本となるものを保持し、それをいっそう高貴なものにするよう諭される。イタリアの学者・詩人・医者のフラカストロ *Girolamo Fracastoro* (1478?-1553) は、この説を敷衍して、画家は「特殊を模倣するが、詩人は特殊ではなく、素朴な概念をそれ自身の美しい晴れ着に包んで模倣する。そしてそれこそアリストテレスが普遍的と呼ぶものだ」と述べる。フラカストロと同様、シドニーは個々の外的事物の絵画的再現と、普遍的なものの概念的画像、すなわち、「あるかもしれない、あるべきはずの」絵姿とを峻別している。

らず口をたたく連中が減ることはなく、これらの高貴な人々に吠えている⁶¹。
詩の下位区分

正当な詩人たちの作品は再区分されて、数種類のさらに特殊な名称を与えられている。最も顕著な区分は、英雄詩、抒情詩、悲劇、喜劇、諷刺詩、弱強格詩、哀歌、牧歌、その他諸々である。これらの名称は、詩人たちが扱う事柄に応じて与えられるものもあれば、詩人たちが最も好んで書いた韻文の種類に応じて命名されたものもある。というのは、実のところ、大部分の詩人たちは、彼らの詩的創案に韻文と呼ばれる韻律を整えた種類の書き物という衣装を纏わせているからだ。実際、韻文は衣装に過ぎない。韻文は詩にとって装飾に他ならず、本質的原因ではない。韻文で書かなかった最高に卓越した詩人たちは大勢存在したし、逆に今日、詩人という名称に金輪際ふさわしくない韻文作者が群れを成しているからだ⁶²。例えば、クセノフォンは卓越した模倣を実践し、キュロスという名の下に「正当な帝国の絵姿」を私たちに与えているが、キケロ⁶³の伝によれば、彼はそこに完璧な英雄詩を作り上げた。同じくヘリオドロス⁶⁴は、テアゲネスとカリクレアの中に甘く精美な愛の絵姿を描き上げた。そして、これら両詩人は、散文で書いたのである。私を取り立ててこれを明言するのは、人を詩人にするのは、韻を踏んだり、律を整えたりするのではないことを示すためである。長いガウンを着ても弁

61 シドニーは、ホラティウスの金言「詩は役に立つと同時に悦ばしくあるべきだ」（『詩学』333行以下）に同調するが、さらに、詩は読者の心を行動へと動かすべきだと付言する。知識は、とりわけ、カルヴァン派の人々にとって、道徳的行動を取らせる充分な根拠にはならないと考えられていた。

62 シドニーは、明らかに、詩の形式よりは、詩の内容を問題としている。

63 キケロ *Cicero Marcus Tullius*(106-43 B.C.) Tully とも呼ばれる。ローマの雄弁家、政治家、哲学者、著作家。共和制末期の混乱の世に、最高の教養と雄弁をもって、不正の弾劾者、自由の擁護者として活躍した。カエサル *Caesar* とポンペイウス *Pompey* との争いではポンペイ側に味方した。カエサル没後の三頭政治家の一人アントニウス *Antony* を弾劾したために、彼に追及され、殺された。哲学的にはエピクロス派とストア派とを折衷した。多数の著作が伝わっており、とくにルネッサンス初期には広く愛読され、ラテン文の模範とされた。彼の著作のうち、『弁論について』*De Oratore*、『国家について』*De Republica*、『法について』*De Legibus*、『義務について』*De Officiis*、『友情について』*De Amicitia*、『神々の本性について』*De Natura Deorum* などは、特によく知られている。

64 ヘリオドロス *Heliodorus* 紀元3世紀ギリシアの恋愛物語作者。シリア *Syria* に生まれた。『エチオピア物語』*Aethiopia*、あるいは『テアゲネスとカリクレア』*Theagenes and Chariclea* と呼ばれるギリシア語の散文物語10巻の著者。これはデルフォイ *Delphi* の巫女カリクレア *Chariclea* とテッサリア *Thessaly* の青年テアゲネス *Theagenes* との恋物語で、当時流行の恋愛物語中最高の傑作として、ルネッサンス期の人々の愛読書の一つとなった。テアゲネスはカリクレアと恋仲になってエジプトへ駆け落ちするが、海賊の手に落ちたり、別れ別れになったりして、数々の冒険の末にエチオピア軍の捕虜となり、カリクレアは人身御供にされそうになるが、まさにその瞬間に彼女はエチオピア王の娘だとわかり、二人は目度度く結婚する、というような物語。

護士になれないのと同じ理屈だ。たとえ甲冑を身に纏って弁護しても、その人は弁護士としてしかるべきであり、軍人ではない。詩人を識別する正当な目印としなければならないのは、その楽しく教えるという手段によって、美德、悪徳、その他諸々の秀でた画像を模造することである。尤も、実際には、詩人たちの元老院は、韻文を自らに最適の衣装として選択し、彼らが内容においてあらゆる点で他の一切に優っているように、形式においても他のものを凌駕しようとして、食卓談義風に、あるいは寢言のように、口から出まかせに言葉を発するのではなく、主題の威厳に応じて各語の各音節に正しく均等にふさわしい軽重を付けるように熟慮するけれど⁶⁵。

Examination: 検討

学問の探求

さて、従って、まずは第三種の詩をそれが人々に及ぼす効果によって、次にはそのジャンルによって比較衡量することは、あながち間違いとは言えないであろう。その上で、もしこれらの分析的解剖のいずれにおいても、詩人に答^{たしな}めるべきところがないならば、私たちに下される判決は、いっそう有利なものになるであろう。知性を清澄にすること、記憶を豊穡にすること、判断力を強化すること、想像力を拡大すること、つまり、通常、私たちが学問と呼ぶものは、たとえそれがどんな名称で現れようと、あるいはどんな直接的な目標に向けられていようと、その最終目標は、土くれの住処に住んで、悪^{あく}しき上にも悪^あしくなった私たちの墮落した靈魂に可能な限り高い完璧さに向かって、私たちを教導し引き上げることである。この目標を掲げることは、当人の性癖に従って、様々な範型を産み出した。この至福が主として知識によって得られ⁶⁶、そして星々と親しむことほど高く天上的な知識はないと考えた者たちは、天文学に身を捧げた。物事の本質的原因を知れば半神になれると思ひ込んだ人々は、科学者や形而上学者になった。感嘆すべき喜悦に魅惑されて、音楽家になった者もいれば、証明の確實性に惹かれて、数学者になった者もいる。しかし、だれも一様に、知るという目的、そして知ることで精神を肉体という土牢から持ち上げ、おのれの神聖な本質的存在を享受したいという目的を保持している。しかし、経験という秤にかけて言えば、星々

65 原文は、**By his works, and then by his parts** 詩の Works とは、それが人々に及ぼす効果(すなわち、teaching and delighting) のことであり、詩の “parts” とは、その種類 (heroic, lyric, tragic, etc.) のことである。

66 「知」と「徳」を均等化するソクラテスの考えは、ルネサンス期のユマニストたちの間では大きく通用していたが、一方で、ルターとカルヴァンの教理は、人間の理性に対する楽観的な見解を覆すのに大きな力があつた。

を見上げている天文学者がどぶに落ち込むかも知れないこと⁶⁷、物事を深く探究する哲学者がおのれについては盲目かも知れないこと、数学者は曲った心で直線を引くかも知れないことが判明したとき、その時こそ、ご覧あれ、個人的意見の制圧者である経験による証明に照らして、これらすべては従属的学問に過ぎないことが日の下に晒されることになる。確かにそれらの学問にもそれぞれ固有の目的が備わってはいるが、それでもそれらはすべて、ギリシア人が「アルキテクトニケ architectonike」（最高の知）と呼んだ女主人である知⁶⁸という最高の目的を志向する。その最高の知とは、私見によれば、ただよく知るということだけでなく、よく行うという目的を保持した上で、倫理的並びに社会的考慮において、おのれ自身を知ることに関わっている。ちょうど、馬具製造者の直截な目的はよい馬具を作ることにあるが、究極の目的は、いつそう気高い職能である馬術に奉仕することであるように、馬術家の目的は軍事的知識であり、軍人のそれは軍事的技術を持つだけでなく、軍人としての働きを実践することである。結果的に、地上における一切の学問の究極の目的は、徳高い行為に結実することになる。徳高い行為を産み出すために甲斐甲斐しく奉仕する技能こそ、その他諸々の技能を支配する君主たる正当な資格を持つのである。

道徳哲学

その問題に関して、出来るかどうかは心もとないけれど、詩人を他のすべての競争相手に優先させることで、詩人の気高さを証明したい。その中で、まず筆頭の挑戦者として名乗りを上げるのは、道徳哲学者たちである。あたかも悪徳を白日の下で見ることには耐えられないかのごとく、むっつりと厳めしい顔をして、彼らがこちらへ近づいてくるのが見えるような気がする。乱れた服装をして外面的な物事を軽蔑する様を外面的に証しようとし、手には栄誉を蔑む内容の書物を持つが、その書物には自らの名前を誇らしく記している。巧妙巧緻を難じるくせに回りくどい言い方をし、だれであれ、むかつくような怒りの過ちを犯すのを見て取ると、すぐ激怒する。これらの人々は、行く先々で定義や区分や識別⁶⁹の施し物を惜しみなくばら撒き、軽蔑を交え

67 つまずいて溝に落ちる天文学者の話は、ごくありふれたものだが、その古典的起源は、プラトン *Theaetetus* にある。その中で、ソクラテスは、紀元前 6 世紀頃のギリシアの哲学者タレスが星を観察している時に井戸に落ちたと述べている。シドニーは同じ話を『アストロフィルとステラ』19 番 11 行「空を見上げながら溝に落ちた人と同じ生き方をするこの私に」で利用している。

68 女主人である知 *the mistress knowledge* 従属的学問 *serving sciences* に対する言葉。両者は主人と召使の関係になる。論理学や修辞学のように、「従属的学問」には一定の限界があるとされる。

69 原文は *definitions, divisions, distinctions*。これらは中世のスコラ哲学の用語だが、ルネサンス期の手引書では通用していた。“definition”とは、物事についての最も一般的言述で、その種類と

て真面目な顔で問い掛ける。徳とは何かを教え、徳の本質、徳の原因と結果を伝授するのみならず、徳の、撲滅されねばならない敵である悪徳や、制圧されねばならない煩わしい下僕である激情を衆目の眼に晒すことによって、徳を包含する一般的なもの、徳から派生する特殊的なものを示すことによって、そして最後に、どのように徳が人間という小さな小宇宙の限界を超えて外へと広がり、家を治め、公共社会を維持することまで及ぶかを明瞭に描くことによって、徳を教えることほど、聞く人を即座に美德へ至らしめる道を見出すことは可能であるかと。

歴史

歴史家がしゃしゃり出て、道徳哲学者にそこまで言う暇さえ与えてはくれない。歴史家は、鼠が食い荒らした古文書を後生大事に抱え込み、大部分は他人が書いた歴史書を基にして自ら権威者ぶる。しかし、その歴史書の最大の権威は、風説という知名の土台の上に構築されており、食い違った見解の著者たちを折り合わせ、偏見の只中から真実を拾い上げるのに大騒ぎをする。現代よりは千年も昔の出来事によく通じており、それでもなお、おのれの知性の働き具合よりは世の中の動き方をよく知っていて、古のことに好奇心が疼き、新奇なことに齧り付き、若い連中には驚異の的、食卓談義では暴君となり、徳と徳高い行為とを教授する術にかけて、だれか彼に匹敵する者がいると言えば、怒り心頭に発し、むきになってこれを否定する。我こそは「時代の証人、真理の光、記憶の生命、人生の教導者、古よりの道案内」⁷⁰というわけだ。哲学者は議論の俎上に載せたまま美德を教えるが、私は行動上の美德を教えると主張する。哲学者の美德は危険のないプラトンのアカデミー⁷¹では優れたものだが、私の教える美德は、マラトン、ファルサリア、ポワチエ、アジャンクール⁷²の戦闘において、その荣誉ある顔を現わすものだ。

特殊な相違とを、例えば、「人間は理性的動物である」というように、定義する。“division”とは、より特殊な分類で、種、部分、属へと区分する。“distinction”とは、本体とその付属物を、例えば、「薔薇とその赤色」というように、識別する。

70 ケケロ『弁論について』*De Oratore* II, ix, 36 より。シドニーの読者層にはお馴染みの言葉であったろう。

71 プラトンのアカデミー **Academy of Plato Academy (Academeia)** というのは、元来はアテネ郊外にあったオリヴの林。プラトンがそこに学園を開いたことから、Academy と言えばプラトンのこの学園を指すことになった。

72 **マラトン Marathon** アテネの北東約 22 マイルのところにある狭い平原。第 1 次ペルシア戦役でミルティアデイス Miltiades(550?-489B.C.) の率いるアテネ軍がペルシア侵入軍を敗退せしめた(490 B.C.) 場所。(陸上競技の「マラソン」は、アテネの市民たちに上記の吉報を伝えるためにマラトンからアテネまで走った兵士の故事に由来する。) **ファルサリア Pharsalia** テッサリア Thessaly にあり、48 B.C. の夏、ユリウス・カエサル Julius Caesar がポンペイウス Pompey を決定的に破ったところ。スペイン生まれのローマの詩人、ルカーヌス Lucan(39-65) の詩『ファルサリア』 *Pharsalia*

哲学者は何がしかの抽象的思考によって美德を教えるが、私は先人たちの足跡に従えと言うのみだ。古老の経験には叡智鋭い哲学者さえ及ばない。しかるに、私は幾時代にもわたる経験を教示するのである。最後にもう一言、哲学者が歌の本を作るとすれば、私は初学者の手を堅琴⁷³に触れさせる、そして哲学者が道案内だとすれば、私は光である。

そう主張して、歴史学者は、一つの話によって他の話を裏付けながら、無数の事例を次々に繰り出し、世にも賢明な元老や君主たちが歴史の教訓を信じてどれほど多くの行動の指針を得たか、ブルータス、アルフォンソス⁷⁴、そして必要があればその他の人々を例に挙げて、申し立てるであろう。結局のところ、長い話を縮めて言えば、このことに尽きる。一方は理論的教条を与え、他方は事例を示す。

詩と哲学

さて、動議となっているのは、学問の府において最優等の学級とは何かということであるからには、一体誰を調停役の議長⁷⁵とすればよいであろうか。心底腹を割って言えば、私見では、詩人こそその任にふさわしい。たとえ、最高の調停役とまでは行かなくとも、上で述べた両者を尻目にしてその称号を勝ち取ってしかるべき人である。それどころか、その他すべての従属的学問を退けて榮譽を手にして当たり前である。従って、詩人を歴史家と、そして詩人を道徳哲学者と比較してみることにしよう。もし、詩人がそれら両者を超えているということであれば、他のいかなる人間の学芸も詩人に比肩するものはないことになる。と言うのも、神学者に関しては、これを敬して常に例外とするのが至当である。神学者は、永遠が一瞬を超えるのと同じほど、上述のいずれをも遥かに超越しているのみならず、正しく本質において上述の各々の領域に優っているからだ。また、法律家に関しては、「法」は正義の娘であり、正義は諸々の美德の長ではあるが、彼は「美德への愛」よ

の主題として歌われた。ボワチエ Poitiers フランス西部の町。百年戦争中の1356年、黒太子エドワード Edward の率いるイングランド軍がフランス軍を破ったところ。アジャンクール Agincourt 北フランス、カレー Calais に近いところにある町。百年戦争中の1415年、ヘンリー五世 Henry V 率いる英軍が仏軍を破り、大勝利を得たところ。

73 Lute ギターに似た楽器。14世紀から17世紀にかけて愛好された。

74 ブルータス Brutus ユリウス・カエサル Julius Caesar を倒したことで有名な Marcus Brutus (78?-42B.C.)。彼は歴史と哲学とに造詣が深く、プルタルコスに拠れば、ポリュビオスの『歴史』40巻に親しんだという。アルフォンソス Alphonsus of Aragon Alphonsus a Sancta Mazia(1396-1456)のこと。ブルゴン Burgon の司祭であり、外交官でもあった人。スペイン史を著わした(1545年出版)。シドニーは、歴史にとくに学んだ人を古代と中世とから一人ずつ選んで挙げたのである。

75 原文は、moderator arbitrator, person in authority. 元来、大学などで行われた学問上の論争に勝負

りはむしろ「処罰への恐れ」⁷⁶によって人々を善良ならしめようとする、いや、もっと正確に言えば、人々を善良ならしめようとするのではなく、ただ人々の悪行が他人を傷つけないように努めるだけで、もしある人が良き市民でありさえすれば、その人がどんなに邪な人間であろうとも、まったく意に介さない。従って、私たちの邪悪さが法律家を必要とし、必要が彼を尊ぶべき存在にしているが、最も深く真実を探れば、法律家はこれらの人々、すなわち、全身全霊を賭して邪悪を除去し、私たちの魂の秘所である小部屋に善を植え付けようと骨折る哲学者、歴史家そして詩人と同列に並びようがない。これらの四領域は、何らかの形で人間の道徳的礼儀作法を考慮することを事とする。そしてそれは最高の知識であるからには、知識を最高の形で育成する者こそが最高の賞賛に値することになる。

その意味からすると、哲学者と歴史家とは、前者は教戒によって、後者は実例によって、その最終目標に到達しようとしている人々である。しかし、両者とも、両方を併せ持つてはいないので、もたついてしまう。哲学者は、刺々しい議論を重ねて、実例を欠いた空虚な規則を定めようとするが、言っていることが難解で、理解するのが霞の中にいるようにおぼろげなので、彼しか道案内がない人は、彼と同行し哲学の道を究めようとしても、老齢に至ってもまだ、正直であるべきことの十分な理由が見出せないということになるであろう。彼の知識は、もっぱら抽象的で一般的な事柄を対象としているので、彼の言うことを理解できる人は幸いであり、理解したことを実際に応用できる人はいっそう幸いである。

他方、歴史家は、教戒を欠き、あるべきこと（理想）ではなく、実際にあること（現実）に縛られ、物事の一般的道理ではなく、物事の個別の事実に縛り付けられているので、彼の差し出す実例は、必然の結果を導き出すのではなく、その結果、実益の少ない教えしか生まれない⁷⁷。

しかるに、比類を絶する詩人は、その両方を成し遂げる。哲学者が為されるべしと言葉で述べるいかなることも、詩人は、それをやり遂げたと彼が想定する人物の中に、その行為の完璧な絵姿⁷⁸を描き出し、結果的に、一般的概念と個別の実例とを結びつける。完璧な絵姿と断言するのは、詩人は、哲

をつける判定者のことで、シドニーもそれを比喩的に利用している。

76 ホラティウス『書簡』Horace, *Epistles*, I, xvi, 52-53より。

77 シドニーはここで、教育の目的としては、一般的普遍的なことを教える方が、個別のなことを教えることに優ると、再度、力説している。

78 「詩は絵のごとく」の伝統に与しているが、注目すべきは、シドニーが詩の聴覚的性質より視覚的性質を強調することだ。彼に拠れば、詩人とは、言葉という媒介物を介して、概念が心眼に映るように伝える役目を果たす。読者の内的思考が真に生きた知識の究極の安息所となる。

学者がただ言葉を連ねて表現することしかしないものを画像化して、精神の諸力の前に提供するからである。哲学者の記述は、詩人の描出ほど、心の眼を打つことも、貫くことも、占有することもない。例えば、外面的な事柄において、象とか犀とかを一度も見たことのない者に向かって、だれかがそれらの形、色、大きさ、一つ一つの特徴をすべてに互って仔細に述べたとしても、あるいは、豪華な宮殿について、その構造の端麗さをあますところなく述べ立て、それを聞いた者に、まるで暗記でもしているように、聞いたこと全部を繰り返させることが巧みにできたとしても、それでもやはり、それを実体験したという生き生きとした知識を与えて、聞く者の内的想像力を満足させることは決してないであろう。しかし、その同じ者が、それらの動物が絵で巧みに描かれているのを見たり、その屋敷が模型で巧みに組み立てられているのを見れば、一目瞭然、直ちに、どんな言葉の描写も必要とせず、それらを公平正当に把握することになるであろう。疑う余地なく、哲学者は、美德であれ悪徳であれ、公的政治問題であれ私的規律であれ、専ら言葉によって学識ある定義を与え、無謬^{むびょう}の叡智の基盤を数多く私たちの記憶に補充してくれるが、それにもかかわらず、その基盤は、詩という物言う絵によって照らされ、視覚化されなければ、私たちには想像することも判断することもままならず、暗闇に閉ざされたままなのである。

キケロは刻苦精励し、かつまたしばしば詩の助力を頼みにして、祖国への愛が私たちの中に持つ強力を私たちに知らしめようとする。老アンキセス⁷⁹が祖国トロイを包む炎の真っ只中でトロイを棄てることを拒否する述懐を聞くだけで、あるいは、カリュプソに与えられた数々の歓楽に満ち足りたオデュッセウス⁸⁰が不毛の貧しい母国イタケを長年留守にしていることを嘆くのみを見るだけで、十分としよう。ストア派の学者たちが言うには、怒りは一時の狂気である。ソフォクレス⁸¹に頼んでアイアスを舞台の上に登場させ、

76 アンキセス Anchises トロイ Troy の王家に連なる武将。イダ山中で牛の群れを飼っているところをヴィーナスに見初められ、彼女によって息子アエネアスを儲けたが、女神の固い戒めにもかかわらず、ある時酒に酔って女神の寵愛を誇ったためゼウスの雷撃を受けて盲目あるいは足萎えとされた。彼が息子アエネアスに背負われて炎上するトロイを脱出し、アエネアスの地中海漂流に従い、イタリアへと向う途中、シシリー島 Sicily で死んで Mt. Eryx に葬られた次第は、ウェルギリウス『アエネーイス』第2歌 634 行以下に語られている。

80 オデュッセウス Ulysses ホメロス Homer の『イリアス』Iliad 及び『オデュッセイア』Odyssey に出るギリシアの英雄で、後者の主人公。イオニア海に浮ぶ島国王国イタケ Ithaca の王ラエルテス Laertes の子。トロイ戦争の花形勇士の一人。トロイからの帰途、海神ポセイドンの怒りを買って船が難破し、彼だけひとりオギュギア Ogygia 島に漂着、そこで女神カリュプソ Calypso (アトラス Atlas の娘) の歓待を受けた次第は、『オデュッセイア』第12巻に語られている。

81 ソフォクレス Sophocles (496-406 B.C.) ギリシア三大悲劇詩人の一人。俳優を2人から3人に、

彼が羊や牡牛の群れをアガメムノンやメネラオス⁸²を大将とするギリシアの軍勢と思ひ込んで殺戮し打ちのめすのを見せてもらえば事足りる。そうすれば、怒りについて、中世のスコラ哲学者の中に怒りの類とか特異性とかを見出すよりは、ずっと親密な洞察が得られないかどうか言っしてほしい。オデュッセウスやディオメデス⁸³における叡智と節制、アキレス⁸⁴における武勇、ニソスとエウリュアロス⁸⁵における友情が、無知蒙昧な人の眼にさえ、鮮やかな光輝を映し出さないかどうか、とくにご覧いただきたい。その逆の場合としては、オイディプス⁸⁶における良心の呵責、アガメムノンにおけるたちまち

コロスを12人から15人に増やし、背景に絵を使い、劇の3部作形式を廃して1編ずつ独立させ、主人公の性格と演技を重視するなど、悲劇に大改革を加えた。前468年以來、およそ120編の劇を書き、政治にも積極的に関与して将軍に選出されたほか、度々要職に就いた。現存する代表作は、『アンティゴネ』*Antigone*、『オイディプス王』*Oedipus Tyrannos*、『エレクトラ』*Elektra*など。ギリシア軍随一の勇士と謳われたアキレス Achillesの死後、その遺品の武器が自分でなくオデュッセウスに与えられたことに怒って狂乱したアイアス Ajax が、家畜の群をギリシア軍と思ひ込んでこれを滅多打ちにしてあばれる場面がソフォクレスの劇『アイアス』*Ajax*の中にある。

82 **アガメムノン Agamemnon** ギリシアの都市国家ミュケナイ Mycenaeの王。トロイ戦争におけるギリシア軍の総帥。10年に及ぶトロイ戦争でトロイを落城させた後帰国するが、留守中に妻クリュタイムネストラを寝取られ、妻とその愛人アイギストスとによって殺される。夫がトロイ遠征に出立する前、航海に必要な順風を得るため、アウリスで娘のイフィゲネイアを女神アルテミスに犠牲として捧げた行為を、クリュタイムネストラは恨みに思い、夫が愛人にしてトロイから連れ帰ったトロイの王女カッサンドラと共に暗殺したと言う。メネラオス Menelaus アガメムノンの弟で、スパルタ Spartaの王。彼の妃であった絶世の美女ヘレネ Helen をトロイの王子パリス Paris が奪い去ったことがトロイ戦争の発端をなす。トロイ落城の折にはヘレネを取り戻し、一旦は彼女を殺そうとしたが、その魅力に抗し切れず仲直りし、8年を費やしてスパルタに帰国した。以後は、ヘレネと共に繁栄と幸福のうちに長の年月故国を統治した末に、最後には夫婦共にエリュシオンの楽園で、不滅の生を享受する特権を許されたという。

83 **ディオメデス Diomedes** トロイ戦争において、ギリシア軍中アキレス Achillesにつぐとされた勇士。『イリアス』の主要人物の一人であり、『アエネーイス』11巻にも出る。

84 **アキレス Achilles** トロイ戦争においてギリシア軍中、第一の勇将。トロイの勇士ヘクトル Hectorを一騎打ちで倒した。しかしのちに、トロイのパリス Paris (一説にはアポロン)に、彼の唯一の弱点であった足のかかとを射られ、トロイの落城を待たずしてあえなく戦死した。

85 **ニソス、エウリュアロス Nisus, Euryalus** アエネーアスの忠実な二人の友。『アエネーイス』第5歌に出る。ニソスは、ルトウリー人 Rutulians との戦いで、捕虜になった親友エウリュアロスを救おうとして、二人は共に死ぬ。

86 **オイディプス Oedipus** ソフォクレスの悲劇『オイディプス王』の主人公。テーベ Thebes の王ライオス Laius とその妃イオカステ Jocasta の息子。「息子は父を殺し母と結婚するであろう」というアポロンの神託の実現を避けようとして、父により生後すぐ両足の踵をビンで貫かれ、キタイロンの山中に棄てられた。しかし隣国コリントの羊飼いに拾われ、子どものなかつたコリント王夫妻の子となるが、成長して後、テーベに向かい、山中の隘路の辻で、実父ライオスの一行と出会い、言い争いの末に、実父と知らずに彼を殺害した。スフィンクスの謎を解き、テーベの町を救った功績で、王妃で実の母イオカステと結婚し、王位に就くが、知らずに犯した大罪のため、やがてテーベは悪疫と飢饉に襲われ、その原因究明の過程で、自らの真の素性を知ったオイディプスは、妻の自殺の後、自分の眼を突いて盲目になり、娘のアンティゴネに手を引かれて放浪の旅に出、アテネ

悔いることになる高慢⁸⁷、彼の父アトレウス⁸⁸における己を食らう残酷、テーベの二人の兄弟における暴力的野心⁸⁹、メディアにおける復讐の苦い甘み⁹⁰。少しばかり品位は下がるけれど、テレンティウスのグナトー⁹¹や我が国の

の近くのコロヌス *Colonus* に来てテセウスの保護を受け、聖林の奥で、神秘的な死を遂げたとされる。オイディプスとは、「膨れ足」の意味。

87 華々しい戦功を挙げて、その褒賞としてアキレスが獲得した愛人のプリセイスを、不当にも彼から横取りして彼を怒らせたアガメムノン⁸⁷は、それを恨んで戦いに出ようとしないうアキレスのため、ギリシア方が苦境に陥り、トロイを囲む味方の戦線に大きな不利を招いたことを悟り、アキレスに鄭重な謝罪をし、財物を与えようとしたが受け入れられなかった。『イリアス』は、このアキレスの怒りを歌え、と歌神に *invocation* をするところから始まる。

88 **アトレウス *Atrous*** ギリシア神話の英雄で、ペロプスとヒッポダメシアの息子。ミケナイの王で、アガメムノンとメネラオスの父。彼の妻アエロベ *Aethra* を誘惑した彼の弟テュエステス *Thyestes* の裏切りにもかかわらず、相手の裏をかく、復讐の為、彼を一旦追放したのち呼び返し、食卓に彼の子供たちの肉を出して彼に食わせた。テュエステスはそこを逃げ出し、神託の教えに従い、自分の娘ペロピア *Pelopia* によって息子アイギストス *Aegisthus* を儲ける。ペロピアはアトレウスの妻となったので、アイギストスはアトレウスの息子として育てられ、テュエステスの殺害を命じられるが、だれが実父であるかを知り、逆に、アトレウスを殺した。アトレウスの息子アガメムノンがメネラオスなどと共にトロイに遠征して留守中に、彼の妃クリュタイムネストラはアイギストスと密かに通じ、凱旋帰国したアガメムノンはこの二人によって殺される。その後、アガメムノンの息子オレストス *Orestes* は、姉エレクトラ *Electra* と協力して父の仇を討つということになって、有名な「オレストス物語」へと繋がる。

89 **テーベの二人の兄弟** オイディプス *Oedipus* の二人の息子エテオクレス *Eteocles* とポリュネイクス *Polynices* のこと。オイディプスがテーベを去ったあと、この二人は共同でテーベの王位を継ぎ、一年ずつ交替で統治する約束をしたが、最初に統治したエテオクレスは一年たっても交替することを拒否したので、一時アルゴス *Argos* に退いていたポリュネイクスは、彼の妻の父であるアルゴス王アドラストス *Adrastus* の援助を得てテーベに攻め寄せ、テーベの七つの城門をそれぞれに攻める七人の勇士の一人として兄と相対して戦うが、オイディプスのかつての呪いのおり、兄弟はたがいに刺しちがえて死ぬ結果になる。Euripides の劇 *Phoenissae* はこの二人の兄弟の抗争を描く。

90 **メディア *Medea*** ギリシア神話の魔女。コルキス *Colchis* の王で、太陽神ヘリオスの息子アイエテス *Aetes* の娘。魔術の守護女神ヘカテがその母とも言われる彼女は、キルケ同様、あらゆる魔術に通暁していた。魔法の力があると信じられた黄金の羊毛を求めてアルゴ *Argo* 船でコルキスへやって来たイアソン *Jason* に恋した彼女は、魔術を利用して彼がアイエテスから課せられる無理難題を果すのを助け、恐ろしい龍に守られていた宝物を首尾よく手に入れさせた。彼のために彼の仇敵ペリアス *Pelias* を殺したのち、イアソンと二人でコリントス *Corinth* へ逃げる。しかし、コリントスへ来たイアソンは彼女を捨てて、その地の王クレオン *Creon* の娘と結婚しようとしたので、彼女は激怒する。彼女の激怒を知ったクレオンは、彼女の恨みが自分と彼の娘の身上に及ぶことを恐れ、メディアと彼女の二人の子供に対して国外追放を言い渡す。しかし、彼女は巧みに一日の猶予を得、その間にイアソンの新しい花嫁とその父クレオンとを謀殺する。その上、イアソンに子孫を残さぬために、自分が生んだイアソンの子供二人をも殺す。そして、絶望に沈むイアソンを侮りながら、彼女はひとりアテネ *Athens* へ去る。Euripides の劇 *Medea* 参照。

91 **グナトー *Gnatho*** プラウトゥス *Plautus*(254?-184B.C.) と並ぶローマの喜劇作者テレンティウス *Terence* (185?-159 B.C.) の『去勢奴隷』 *Eunuchus* に出る食客 *parasite* の名。彼の劇は、上品軽妙で、教養ある上流階級の趣味に合っていた。

チャーサーのパンダロス⁹²、これらは実に見事に活写されているので、今日私たちは彼らの職業を表すのに、彼らの名前を使うほどである。つまるところ、あらゆる美德、悪徳および激情が各々に固有の自然な状態で眼前に提示されるので、私たちはそれらについて耳で聞くのではなく、目で見て明瞭に透視すると思われるのである。

しかし、善とは何かについて最も卓越した結論において、どんな哲学者の勧告がクセノフォンの作り出した虚構のキュロスほどに、あるいは、ウェルギリウスのアエネアスのごとくあらゆる運命の下で徳高い人物ほどに、あるいはまた、一国全体の指針としては、サー・トマス・モアの『ユートピア』⁹³の流儀ほどに、迅速に君主を導くことができるであろうか。流儀という訳は、サー・トマス・モアが過ちを犯した場合、それは人間としての間違いであり、詩人としてのそれではないからだ。国の青写真をあのように描くのは極めて真っ当なことであり、ただ、ひょっとして、彼がその作業をまったく文句のつけようがないほど完璧には実行していない憾みが残るだけだからである。問題となるのは、詩の模造された画像と哲学の正規の教示とでは、どちらが教えることにおいて、より大きな力があるかである。その点に関して、もし、詩人たちが自らの職業の最高点に到達したよりも、哲学者が自ら哲学者であることの実をより正しく表している^{じつ}とすれば、実際、「詩人における凡庸さを、神々も、人々も、書籍商も、許すまじ」とある通り、それは、再度言うが、詩芸術の罪ではなく、詩芸術に通暁し得る人が数少ないということなのである。

確かに、私たちの救世主キリストさえ、金持ちとラザロの卓抜な話ではなく、無慈悲と謙讓についての、あるいは放蕩息子と寛大な父親の絶妙な話ではなく、不服従と慈愛についての、道徳的名文句⁹⁴を与えることがお出来になったであろう。しかし、主のすべてを見通す叡智は、金持ちが地獄の業火

92 パンダロス Pandarus は、チャーサー Chaucer の『トロイラスとクリュセイデ』 *Troilus and Criseyde* に出るトロイラスの親友で、クリュセイデの叔父。クリュセイデに恋するトロイラスに彼女を取り持った。シェイクスピア劇 *Troilus and Cressida* でも同じ。男に女を世話する男、あるいはそういう行為をすることを意味する “pander” という英語は彼の名に由来する。

93 『ユートピア』 *Utopia* は、トマス・モア Thomas More (1478-1535) の主著。モアは、イングランドの大法官、著述家で、ヘンリー8世に仕えたが、宗教改革に際し、王妃との離婚とアン・ブーリンとの再婚を認めなかったので反逆罪に問われ、処刑された。1935年聖列に加えられた。*Utopia* (原文ラテン語) は、1516年にルーヴアンで出版された。ロビンソン Ralph Robinson の英訳が出たのは1551年。*Utopia* とはギリシア語によるモアの造語で「どこにもない国」の意。モアの理想国が描かれているとされる。

94 原文は、**Commonplaces** 人々の手帳に書き写され、しばしば引用されるような名言秀句の類。「陳腐(の言)」という意味は後世のもの。

に焼かれ、ラザロが天のアブラハムの胸に抱かれる境遇の方が私たちの記憶と判断力にいつそう恒常的に（いわば）住み着くであろうということを知っていたのである。実際、私自身に関して言えば、放蕩息子の尊大な道楽三昧が一転して豚の餌さえ羨むに至る場面が眼前に浮かぶような気がする。これらのことは、博学な神学者たちによって、史実ではなく、道徳的寓話であると思われる。

結論として言うと、哲学者は、教えはするが、曖昧模糊とした教えであるので、有識者にしか理解できない。つまるところ、彼はすでに教えられている人々に教えるのである。ところが詩人は、最も虚弱な胃袋にとつての食物である。詩人は、実のところ、民衆にとつての正しい哲学者である。その適切な証拠をイソップの物語⁹⁵が与えており、そのかわいい寓話は、獣たちの話という外衣の下にこっそりと隠れて、獣たちよりもさらに獣的な多くの人々に、美徳の声を初めてそれらの物言わぬ話し手たちから聞き取らせるのである。

詩と歴史

さて、ここで、以下の主張がなされるかも知れない。このように物事を画像化することがそれほど想像力に適合しているならば、真実の事柄、例えば、実際になされたことで、なされたように幻想的または虚偽的に暗示されるかも知れないものでないものの画像をもたらず歴史家こそ、必ずや他に抜きん出ているはずだと。なるほど、アリストテレス自らが彼の詩論⁹⁶の中で明晰にこの問題に決着を付けており、詩とは「フィロソフォテロン *philosophoteron*」、かつまた「スプーダイオテロン *spoudaioteron*」、すなわち、詩は歴史よりもいつそう哲学的であり、いつそう学問的に厳粛であると述べている。彼の論拠は、詩は「カトルー *katholou*」、すなわち、普遍的問題の考察に携わり、歴史は「カトエカストン *kathekaston*」、すなわち、個別的問題を扱うというものだ。彼の主張では、普遍的なものは、蓋然性または必然

95 イソップ *Aesop* 紀元前6世紀中頃の人と言われるギリシアの伝説的な寓話作家。ギリシア名はアエソポス。ヘロドトス *Herodotus* によれば、トラキア人 *Iadmon* という人の奴隷であった。動物の世界にことよせた教訓や諷刺の多数の物語がギリシアの昔から彼の名の下に流布し、通例、『イソップ寓話集』*Aesop's Fables* と呼ばれる。聖書のたとえ話と同様に、寓話は露骨な定義でなく、生き生きした例示によって道徳を「楽しく教える」のである。

96 アリストテレス『詩学』*Poetics* 9章につきのような一節がある。「歴史家と創作家(詩人)の違いは、語るに韻律をもってするか否かという点にあるのではない。ヘロドトスの文章は、これを韻文に直すこともできるであろうが、しかしそれが歴史であることは、韻律の有無にかかわらず、すこしも変わるところがないのである。両者の違いはむしろ、一方が実際にあった出来事を描くのに対して、他方はあり得るであろうようなことを描くという点に存在する。それゆえ、詩は歴史よりも哲学的であり、価値多いものでもある。なぜなら、詩の述べる事柄は、どちらかと言えば普遍的な性質のものであるけれど、歴史の述べるのは、個別的事柄であるからである。」(藤沢令夫訳、一部改変)

性において、言われたり、なされたりするのにふさわしいことを考慮し、詩はそれをおのれが与えた(虚構の)普遍的名称⁹⁷を用いて考えるが、個別のもの、ただアルキビアデス⁹⁸がこれやあれをしたとか、これやあれをされたとかを特徴づけるに過ぎない。以上のようにアリストテレスは述べるが、彼のこの論拠は、すべてにおいてそうであるように、ことごとく理に適っている。

実のところ、もし問題となるのが、ある特定の行為が事実通りに書き留められた方がいいのか、偽って述べられた方がいいのかということであるならば、どちらが選ばれるべきかに疑問の余地はない。ローマ皇帝ヴェスパシアヌス⁹⁹の肖像画が本人と瓜二つであるのがいいのか、画家の気ままに任せて、まったく似ていないのがいいのか、というのと同じことである。しかし、もし問題が、あなた自身の実益と学問にとって、あるべきように記録されるのと、あったがままに記録されるのと、どちらがよいかということであれば、それは確実に、クセノフォンにおける虚構のキュロスの方がユスティヌス¹⁰⁰における真実のキュロスよりも、また、ウェルギリウスにおける虚構のアエネーアの方がダレス・フリギウス¹⁰¹における正しいアエネーアよりも、

97 シドニーが自作の登場人物に普遍的名称を与えている例は、Basilius (ruler)、Pamela (all sweetness)、Philoclea (lover of glory)、Astrophil (star-lover)、Stella (star) その他数多い。

98 アルキビアデス Alcibiades (450?-404 B. C.) アテネの将軍、政治家。ペロポネソス戦争では、故国を敗北に導く原因を作った。ソクラテスの弟子で、プラトンの *Alcibiades* および『饗宴』*Symposium* にも登場する。祖国アテネと合わず、一時はスパルタやペルシアに与してアテネに敵対した。最後にはふたたびアテネに戻って来てペルシアと戦ったが、敗北を喫し、フリュギアに亡命中にペルシア側の命令で殺された。アルキビアデスは、人間的魅力に富み、政治的軍事的能力も優れていたが、無節操極まりなく、彼の政治的行動はすべて利己の打算に基づいていたため、アテネ、スパルタ、ペルシアからの信頼を失い、悲惨な最期を遂げた。

99 ヴェスパシアヌス Vespasian (9-79) 卑賤より身を起こしたローマ皇帝(在位 70-79)。簡素な生活と有能な政治とをもって知られ、コロッセウム Colosseum を建設した。

100 ユスティヌス Justin 紀元3世紀(一説には4世紀あるいは5世紀)の歴史家。Trogus Pompeius (Augustus 時代の歴史家)が書いた44巻の世界史 *Historiae Philippicae* (現存せず)を縮約したものを書き残し、1564年に Arthur Golding の英訳が出た。

101 ダレス・フリギウス Dares Phrygius ホメロスが『イリアス』第5歌9行以下で記しているトロイの僧。トロイ戦争に参加し、ホメロスよりも早くその戦争を歌う詩を書いたと、永く信じられていた。紀元5世紀に、その詩のラテン訳と称するもの (*Daretis Phrygii de Excidia Troiae Historia*) が出た。それには、Cornelius Nepos (紀元前1世紀のローマの歴史家)がアテネでその詩の原文を発見した次第を Sallust に説明しているにせ手紙が序文としてつけてあり、いかにも Nepos による翻訳であるかのごとくに見せかけてある。中世には、これと並んで、クレテ出身の兵士 Dictys Cretensis のトロイ参戦日記なるものも流布していた。4世紀にそのラテン語訳と称するものが出た。今日では両書ともあきらかに偽本とされるが、中世人はそれらの真实性を疑わず、トロイ戦争を語る場合に重要な典拠とした。Dares Phrygius のトロイ戦史は、1553年に Thomas Paynell による英訳も出版された。シドニーも、おそらくスカリジュール Scaliger などにならって、Dares Phrygius の著作をまじめに受け取っていたと思われる。

教えに富んでいる。ちょうど、顔を最高に優美に作りたいと望む御婦人に対して、画家は、ホラティウス¹⁰²が薄汚い醜女^{しごめ}あったと断言しているカニディア¹⁰³を実物どおりに描くよりは、この上なく優美な顔の肖像画にして、そこへカニディアと記しておく方が為になるのと同じ理屈である。

詩人が自らの役割を正しく果たすならば、タンタロス¹⁰⁴、アトレウス、その同類においては避けてしかるべきものを示し、キュロス、アエネアス、オデュッセウスにおいては追隨してしかるべきものばかりを教示するであろう。しかるに歴史家は、物事を現実にあったがままに語るように束縛されているので、彼が詩的になろうと決意しない限り、ある完璧な模範を自由に披露することはあり得ず、例えば、アレクサンダーヤスキピオ¹⁰⁵その人の場合

102 **ホラティウス Horace**(65-8 B.C.)ローマの詩人。解放奴隷の子に生まれ、ローマとアテネで学んだ。詩作を通じてウェルギリウスと親交を結び、マエケナスの援助を受けて、やがて皇帝の知遇を得た。ルネサンス期の古典復活において絶大な人気を博し、ヨーロッパ全土に多大の影響を及ぼした。彼の2巻の *Satires*, 30 篇の *Epodes*, 4 巻の *Odes*, 2 巻の *Epistles* は古典文学の精粋とされた。彼の『詩論』*Ars Poetica* は、シドニーの『詩への弁護』にも影響を与えている。

103 **カニディア Canidia** ホラティウスの叙情詩 *Epodes* や諷刺詩 *Satires* に歌われ、愛情を無視された彼がその仕返しに、妖術使いだとして悪し様に言った前1世紀ネアポリス *Neapolis* の高級遊女の名。

104 **タンタロス Tantalus** 主神ゼウスの子で、ペロプス *Pelops* (父に殺され、その肉は神々の食卓が上がったが、後にヘルメスによって復活した) とニオベ *Niobe* (子供たちの数の多さを自慢したため皆殺しにされ、自分は石になってなお涙を流したという) の父。シビュロス山の王。罪を犯したため地獄に落され、永劫の罰を受けた。罪については諸説あり、神々の秘密を洩らした罪(自分の息子の肉を神々に供した罪とも、神々の食卓から神聖な食べ物・飲み物であるアンブロシアとネクターを盗み、それを人間に与えた罪とも言われる)によって、黄泉の国 *Hades* の池の中に繋がれ、水は彼の顎のところまで来ていながら、彼が渴えてそれを飲もうとすれば退いて飲めず、彼の頭上に垂れた木の枝から果物を取って空腹を満たそうとすれば、そのたびに風が吹いて、その枝を彼の手の届かぬところへ持って行ってしまったという。ピンダロスに拠れば、彼の頭上には大石がまさに落ちようとしており、彼は常に大石に押し潰される恐怖に捉われていたという。

105 **アレクサンダー大王 Alexander** (356-323 B.C.) 古代マケドニア *Macedonia* の王。アリストテレスの弟子で、ホメロスの崇拜者。二十歳で自国の王位を継承し、後13年間でギリシアおよびペシルアを征服し、古代最大の支配者として君臨し、いわゆるヘレニズム *Hellenism* の世界を築いた。彼に対する古代の歴史家たちの評価は二分され、英雄として賞賛する者もいるが、例えば、*Quintus Curtius* のように、好意的でない者もいる。**スキピオ Scipio** *Scipio Africanus Maior* (or *Scipio the Elder*. 235?-?183B.C.)、あるいは、その養孫 *Scipio Africanus Minor* (or *Scipio the Younger*. 185?-?129B.C.) か、不明。前者ならば、古代有数の戦略家 *Hannibal* (247?-?183B.C.) を破ってスペインを征服し、またアフリカのザマ *Zama* でハンニバルを破って第2ポエニ戦争 (*the second Punic War*) を終わらせたローマの武将のこと。後者ならば、カルタゴ *Carthage* を滅ぼし (146 B.C.)、3次にわたるポエニ戦争を最終的に終結せしめ、ついでスペインを平定した武将であると同時に、すぐれた弁論家で、高潔・教養があり、ギリシア文化にも造詣が深く、また、彼の周囲に文人たち (テレンティウス *Terence* もそのうちの一人) を集めて文芸の保護者ともなり、キケロ *Cicero* によって理想化され、ローマ最大の人物と称えられた人物のこと。

でも、彼らの行為の中で、好ましいものと、好ましからざるものと、その両方を示すのである。それならば、クイントス・クルティウス¹⁰⁶を読まずして持っているおのれの分別によって以外に、何を範として従うべきか、どうして見分けられるのか。他方、普遍的事柄の教師としては、たとえ詩人が凌駕していようと、しかし、歴史は、これこれのことが現実になされたと言うことにおいて、人が従うべき範例に関し、より信頼できる保証人として奉仕すると言ひ張る者がいるかもしれない。それに対する答えは明白である。当人が、昨日は雨だった、ゆえに、今日も雨が降るはず、と論じでもするかのごとく、過去の事実^{こりやく}に立脚するのであれば、なるほど、それも粗悪な理解力には何らかの御利益があるであろう。しかし、もしその人が、事例はただそうなるらしいと推測されるものを示唆するに過ぎないことを知り、論理的に進むのであれば、詩人は、軍事であれ、政治であれ、個人的問題であれ、最も理に適ったものに合わせて彼の実例を適応させるはずであるだけ歴史家を凌駕していることになる。しかるに、歴史家は、彼の剥き出しの「あった」という事実の中に、最高の叡智をも制圧する運命と呼ばれるものをしばしば持つ。歴史家は、その原因を評釈できない出来事を語らねばならない。仮にそれを語るとすれば、詩的にならざるを得ないのである。

虚構の事例が真実の事例と同じだけ教える力を持っていることを明示するために(感情を掻き立てる力に関しては、虚構の事例は激情の最高音にまで調律されるので、この点は明瞭である)、歴史家と詩人とがたまたま一致して扱っている一例を取り上げてみよう。ヘロドトス、ユスティヌスの両名ともが以下のことを証言している。ダレイオス王の忠臣ゾプユロス¹⁰⁷は、主君が長の年月バビロニアの反乱軍の抵抗に苦虫を噛み潰しているのを目の当たりにして、王のはなはだしい不興を買った者として自らを装い、その証拠に、自分の鼻と両耳を切り落とさせ、その姿でバビロニア軍の許に走り、彼らに迎合され、彼の世評名高い武勇のゆえに多大な信用を寄せられて、ついには、反乱軍をダリウス王に引き渡す手段を見出したという事蹟である。こ

106 クルティウス *Quintus Curtius Curtius Rufus* とも呼ばれる 1 世紀ローマの歴史家。クラウディアス *Claudius* 帝 (A.D.41-54) あるいはウエスパシアヌス *Vespasian* 帝 (70-79) の時代に、ラテン語でアレクサンダー *Alexander* 大王の伝記を書いたローマの歴史家。全 10 巻中、最初の 2 巻は散失して伝わっていない。

107 ダレイオス、ゾプユロス ダレイオス *Darius* は、キュロス *Cyrus*、カンビセス *Cambyses* に続くペルシア王ダレイオス一世 (521-486 B.C.) のこと。巨大な帝国に秩序を回復したのち、ギリシア全土の征服を意図していわゆる第 1 次ペルシア戦争を起こしたが、 Marathon *Marathon* の戦い (490 B.C.) でアテネ軍に敗れ、その意図を阻まれた。彼の忠臣 *Zopyrus* のことは、ユスティヌス『歴史』第 1 巻、ヘロドトス『歴史』第 3 巻に出ている。

れと類似の出来事を、リヴィウス¹⁰⁸もタルクウィニス¹⁰⁹と彼の息子について記録している。クセノフォンも、キュロス王のためにアブラダタス¹¹⁰が行った同様の戦略を絶妙に虚構化している。さて、私は知りたく思うのだが、このような誠意から生まれた偽装によって主君に尽くさねばならない機会が与えられたとしたら、他方の真実からと同じく、クセノフォンの虚構から、それをどうして学ばないのか。実をいうと、そうする方が、みすみす鼻を切り落とされずに済むから、はるかにましである。

かくなる次第で、歴史家の最善のものでさえ、詩人の下位に従属する。歴史家がただ復唱するしかない、いかなる活動・行動も、いかなる忠告、政策、戦略も、詩人は、その気になれば、彼の模倣行為によっておのれのものとすることができ、さらに先を教え、いっそう喜びを与えるために、思いのままにそれを美化できる。ダンテが描く天国から地獄まで¹¹¹、一切のものを彼の文筆の権威の下に従えているのである。そういうことをどんな詩人が成し遂げたのかと尋ねられるならば、何人かの詩人の名を挙げるのは容易なことだが、何度でも言うが、私はこの詩芸術それ自体を論じているのであって、詩芸術を実践している人のことを論じているのではないのである。

さて、あたかも結果を検討すれば、そこに美徳が賞揚され悪徳が処罰されるのが見て取れるかのごとく、結果に注目することで顕著な学問が手に入るとする見解に立って、歴史に贈られる賛辞へとたいい帰結することに関してだが、実のところ、その賛辞は詩に特有のものであり、歴史にはまったく

108 リヴィウス *Livy, Titus* (59 B.C.-A.D.17) パタウィウム *Patavium* (パドバ *Padua*) 生まれの古代ローマの歴史家。皇帝アウグスツス *Augustus* 側近の文人となり、ラテン語で『ローマ史』(*Ab Urbe Condita* 142 卷)の名著を著したが、中世以来、Books I-X と XXI-XLV (XLI と XLIII は不完全) 以外は伝わっていない。しかし、この大著の紀元1世紀に書かれた縮約本(消失)から作られた抜き書きがほぼ完全な形で残っているので、原著の全貌をうかがうことができる。それはローマ建国の当初から紀元前9年(アウグスツス帝の治下)にいたるローマ通史であった。リヴィウスは中世の間ほとんど顧みられず、ルネサンスになって急にでもはやされるようになり、1469年にローマでその最初の版本が出た。(Philemon Holland の英訳が出るのは1600年である。)『ローマ史』は、共和制の伝統を賛美し、ローマ固有の道徳を強調し、キケロの文体で精彩ある美文で綴られている。リヴィウスは、驕慢なタルクウィニスの息子セクトゥスが敵方に走り、偽装し敵を騙して取り入り、その立場を実父に有利に働くように利用したと記録している。

109 タルクウィニスとその息子 ローマのなかば伝説的な二人の王、*Tarquinius Priscus* (*Priscus* = 'the Elder' とはリヴィウスの命名)と、その息子 *Tarquinius Superbus* のこと。(ルクレティア *Lucretia* を凌辱したセクトゥス *Sextus Tarquinius* は後者の息子。)タルクウィニス一家のことはリヴィウスの『ローマ史』第1巻に語られている。

110 アブラダタス *Araspes* の誤り。クセノフォン *Xenophon* はシドニーがここで言及している話を *Cyropaedia* の中で語っているが、当該人物の名は *Araspes* である。

111 ダンテ *Dante* の『神曲』*Divine Comedy* は、'Inferno' (地獄), 'Purgatory' (煉獄), 'Paradise' (天国)の3部構成である。

当てはまらない。というのも、実際、詩は常に美德を最高の装いで引き立て、運命の女神を美德にまめに仕える侍女として侍らせ、その結果、誰でも美德に必ずや魅了されることになる。嵐に巻き込まれ、またその他の苦難に往生するオデュッセウスがありありと目に浮かぶであろうが、それらは忍耐力と高潔な精神への試練に他ならないもので、すぐに続けて訪れる繁栄の中でそれらをそれだけいっそう輝かせるものとなるのである。これとは逆に、悪人が舞台上に登場すれば、彼らは常に（その類の人物を見せられることを嫌がった人に、悲劇作家¹¹²が答えたように）、きつく手足を縛られて退場するので、彼らを見習いたいという気には、まずなりはしない。しかるに歴史家は、愚かな世界の真実が感じがらめに縛り付けられているので、しばしば人を脅すようにして善行から遠ざけ、歯止めの利かない悪行を奨励することになる。例えば、勇士ミルティアデス¹¹³が足枷を嵌められたまま牢獄で腐っていくのを見ないであろうか。正義の士フォキオン¹¹⁴や賢者ソクラテス¹¹⁵が反逆者として死刑に処せられるのを、残忍極まるセヴェルス¹¹⁶が栄華に包まれて暮らすのを、英邁なセヴェルス¹¹⁷が無残に殺戮されるのを、スラとマリウス¹¹⁸が

112 悲劇作家 エウリピデス Euripides のこと。プルタルコス Plutarch の伝えるところによれば、ジュピター Jupiter に天上へ連れて行かれたあとユーノ Juno を誘惑しようとした彼のイクシオン Ixion を好まなかった人々に対して、エウリピデスがそう答えた。

113 ミルティアデス Miltiades(550?-489B.C.) マラトン Matathon の戦い(490 B.C.)でアテネ軍を指揮してペルシア軍を敗走せしめた武将。しかし、その翌年アテネの軍艦 70隻を率いて行なったパロス Paros 島攻撃には失敗し、そのためアテネ市民の弾劾を受け、この敗戦で受けた傷がもとでアテネの牢獄で屈辱の中に死んだ。

114 フォキオン Phocion(402?-318B.C.) アテナイの將軍・政治家。親マケドニア政策を取り、アレクサンダー大王の死後(322B.C.)、マケドニアの勢力下でアテナイの実質的独裁者となったが、318 B.C.に反逆罪に問われ、死刑になった。プルタルコスは、彼のことを実直な愛國の指導者として称えている。

115 ソクラテス Socrates(470?-399B.C.) ソクラテスが新しい神々を招き入れ、また青年を墮落させているという理由で、メレトスやアニュトスらに告訴され、裁判にかけられて死刑の宣告を受け、悠然と毒杯を仰いだ次第は、彼の弟子プラトンの『ソクラテスの弁明』Apology、『クリトン』Crito および『バイドン』Phaedo によって詳しく伝えられている。

116 セヴェルス Lucius Septimus Severus のこと。ローマ皇帝(193-211)。永く治世を保ったが、その間、競争者を冷酷に粛清し、外敵を討ち、裁判を厳しくした。遠征先のブリテン島で死去。

117 英邁なセヴェルス Flavius Valerius Severus のこと。ローマ皇帝(306-7)。気高いが無力な指導者で、マクセンティウス Maxentius 率いる反逆軍に対して皇帝の座を防衛できず、彼に降服して、自殺を遂げた。

118 スラ、マリウス Lucius Cornelius Sylla (or Sulla) (138-78 B.C.) は、古代ローマの將軍・政治家で、独裁者。元老院権力の強化を図った。Gaius Marius (157?-86 B.C.) は、7度執政官になった政治家・將軍。二人は、それぞれ貴族の党と平民の党とを率いて激しい政争を繰り広げ、紀元前1世紀初頭のローマに戦乱と流血の世を作った。

寝床の上で穏やかに死んでいくのを、ポンペイウス¹¹⁹とキケロが亡命生活を幸福と思ったであろう矢先に殺害されるのを。また見ないであろうか、有徳の士カトー¹²⁰が自殺へと追い込まれ、逆徒カエサル¹²¹が大出世し、1600年後の今日でさえその名は依然として最高の荣誉に輝いているのを。そしてまさしくカエサル自身が前記のスラについて述べた言葉（カエサルもスラの不正な暴政を倒すという点においてだけは、真つ当なことをしたのだが）、「彼は文物に無知である」という言葉に注目してほしい。あたかもスラには学問がなかったので独裁者として成功したと言わんばかりである。彼は詩を念頭に置いてそう述べたのではない。詩は暴君の処罰のために地上の苦患だけでは満足せず、地獄での新しい刑罰をひねり出すからだ。また哲学を念頭に置いたのでもない。哲学は「暴君は処決されるべし¹²²」と説くからだ。ならば疑いなく、歴史に関する知識を念頭に置いていたのである。歴史の知識があれば、実際、キュプセロス、ペリアンドロス、ファラリス、ディオニュシオス¹²³、その他数知れない同類の者ども、極悪非道や篡奪を繰り返して大いに栄

119 ポンペイウス (106-48B.C.) は、ファルサルリア Pharsalia の戦い (48 B.C.) でユリウス・カエサル Julius Caesar に最終的に敗れ、エジプトに逃げたが、そこで殺された。キケロ (106-43B.C.) は、前 44 年カエサルが謀殺されたあと共和派に味方し、新しい三頭政治で権勢を振いはじめたアントニウス Antony にとくにはげしく反対したため、命の危険に晒され、逃亡を図ったが、アントニウスの意を呈した刺客に殺された。

120 カトー Marcus Porcius Cato (95-46B.C.)、すなわち、Cato the Younger のこと。ユリウス・カエサルの政敵。ポンペイウスの死後もカルタゴの北西ウティカ Utica にこもってカエサルに抵抗をつづけたが、もはや己の主義の破れたことをさとり、自殺した。歴史家リヴィウス Livy は、彼を世の段誉褒貶に超然たる「ローマの良心」と賛え、キケロは彼に賛辞『カトー』を贈り、逆に、カエサルは『反カトー論』を書いて激しく反駁したが、後世、彼は清廉潔白、高德の士として賞賛された。

121 逆徒カエサル Julius Caesar (100-44B.C.) は、49B.C. のはじめ、ガリア制圧に従事していた彼の軍隊を引き返し、ルビコン Rubicon 川を渡ってイタリアに入り、元老院に宣戦布告し、ポンペイウス Pompey を追い落してローマの実権を握ることになった。

122 原文は "occidendos esse" . プラトンが専制政治を激しく憎悪したことは、『国家』8-9 章に明らかである。

123 キュプセロス Cypselus コリント Corinth の僭主 (在位 657?-9625B.C.)。バックシアダイ一族による寡頭政治を倒して王となり、民衆の支持を得て、海外貿易を盛んにし、コリントを当時のギリシアにおける最強国にした。ペリアンドロス Periander キュプセロスの子。父のあとを継いで 625 B.C. 頃から 585B.C. 頃までコリントを支配した。怠惰や奢侈を禁じ、産業・商業を奨励したため、コリントは繁栄を極めた。ギリシア七賢人 (Seven Sages) の一人に数えられた。ファラリス Phalaris 紀元前 6 世紀の前半の頃古代シチリア、アクラガス Acragas の僭主。アクラガスの要塞の中でゼウスの神殿建設を引き受け、作業員を武装させて権力を掌握。治世中アクラガスを繁栄させ、領土を拡大したが、テレマコスに倒された。彼の残酷さは伝説的に有名で、犠牲者たちは真鍮製の雄牛の中で火あぶりにされ、自らもその犠牲になったという。一方、ローマ帝政期のソフィストたちは、彼を人間味のある教養人としている。ちなみに、この真鍮製の雄牛を発明したのはペリロス Perillus という男で、これを用いて最初に陥り殺されたのもこの男であった。ディオニュシオス

えている者どもを、いくらでも差し出すことができるのである。

従って、私はこう結論する。詩が歴史に優るのは、私たちの精神に知識を提供するのみならず、善と呼ばれ善と評価されるに値するものへと私たちの精神を駆り立ててくれることにおいてである。精神を善行へと駆り立て前進させることこそ、実に詩人の頭上に勝者としての月桂冠を戴かせる^{ゆえん}所以となり、歴史家の上位に、また、教えるという点では、たとえどれほど議論の余地があろうとも、哲学者の上位に位置させることになるのだ。

心を動かすこと

所詮、強力な論拠によって否定されるとは思いますが、仮に一步譲って、哲学者が方法論的な手順を踏んで理を説くことに鑑みて、詩人よりいっそう完璧に教えると認められたとしても、心を動かすという点で哲学者を詩人に比肩させるほど「哲学者最良¹²⁴」の人はいないと思われる。そして、その心を動かすということが教えることよりも高級であるのは、それが教えるということの文字通り結果であり原因でもあることによって、はっきりしている。教えられたいという願望で心を動かされなければ、一体だれが教えを受けようとするであろうか。そしてその教えるということは（私は常に道徳律のことを言っているが）、人の心を動かして、それが教えることを実行させるということほど、大きな利益を他に生み出すことがあるだろうか。アリストテレスが述べている通り、グノーシス（gnosis 知識）ではなくプラクシス（praxis 実践）こそが教えの成果とならねばならないのである。実践へと心が動かされることなく、どうしてプラクシスがあり得るか、少し考えてみれば簡単に分かることである。

哲学者は行く道を示してくれる。細々とした事を知らせてくれ、同時に、道中の煩わしさや、旅路を終えたときに待ち受けている楽しい旅籠のことも、本道から外れて道草を食うかもれしない多くの横道のことも教えてくれる。しかし、これが分かるのは、彼の著作を読んでみよう、神経を集中し刻苦精励して読んでみようと人に限られている。そういう一途な願望を胸中に懐い

Dionysius 古代シラクサ Syracuse の僭主 (405-367 B.C.)。ギリシア人で初めて南イタリアを統治した。卑賤から身を起し、前王朝滅亡後の混乱に乗じて人心をつかんで王となり、シシリー島の半分を領有したばかりでなく、イタリア本土へも遠征の軍を進めた。詩文のたしなみもあって、レナニア Lenaea の祭典に自作の劇を出して優勝し、その祝賀の宴で酒の飲み競べをし、飲みすぎて死んだ。それより前、哲学者・政治家の、義弟ディオニオン Dion (408?-354B.C. Wordsworth に彼の死を歌った詩がある) によってプラトンを紹介されたが、彼によって感化されるどころはなく、逆に、彼の宮廷を去ったプラトンを他人に奴隷として売ろうと企てたという伝説がある。

124 原語は **Philophilosophos** “a lover of philosopher.” シドニーの造語。“philosopher” の語源的意味が “a lover of wisdom” であることは言うまでもない。

ている人はだれであれ、すでに難儀な航路の半ばを通り過ぎてきた人で、従って、哲学者から受けるはずの恩義は、残り半分に対してのみである。いや、実のところ、学識高い人々は学識高く考えてきた、一旦理性が激情の主となり、精神が善をなしたいという自由な願望を持つところでは、各人の精神に宿る理性の内なる光は、哲学者の著作に優るとも劣らぬ働きをする。自然の本性に照らして、私たちは知っている、哲学者が恵んでくれる専門的技巧的言葉によってではないが、善い行いをするのは善いことであり、何が善で、何か悪かを。なぜなら、哲学者たちも専門的技術を内在的な本能的知識¹²⁵から引き出しているからだ。しかし、私たちが知っていることを実践するように心を動かされること、あるいは、知りたいという願望で心を動かされること、「これこそ課題であり、これこそ難事である¹²⁶」のだ。

さて、この点において、あらゆる学問のうちで（私はあくまでも人間について、人間の叡智に従って述べている）、詩人こそ王者である。詩人は進むべき道を示すだけでなく、誰でもが魅惑されて足を踏み入れたくくなるような悦ばしい光景をその道の行く手に見せてくれるからである。いや、詩人は、あなたの旅路が美しい葡萄畑を突っ切っているかのように、当初初めに葡萄の一房を与え、その味わいに腹膨れて、もっと先へと踏み込んでみたいと憧れさせる。詩人は曖昧模糊とした定義を並べて書物の余白¹²⁷を諸々の解釈で汚したり、記憶に疑念を積み込まねばならないようなことはしない。詩人は、音楽という蠱惑的技芸と同行するか、あるいは、同行の身支度をして、心地よい均整を保って書かれた言葉を伴って近づいてくる。実のところ、詩人は物語を携えて近づく。子供たちの遊ぶ手をやめさせ、老人たちを炉辺から離れさせるような物語を抱えて。そして、物語でしかないと言いつ張りながら、人心を邪悪から美德へと搔ぐ攫おうと企図する。ちょうど、子供がしばしば何かしら舌触りの良いものに包んで体に良い苦薬を飲まされるのと同じ理屈である。子供にこれから飲まされるアロエやダイオウ¹²⁸の性質を講釈し始めると、せっかくの薬なのに、口よりは耳で飲みたがるであろう。大人も同じことで（大人といえどもその大部分は、最善のことで子供も同然、墓を

125 原文は“natural conceit”この言葉でシドニーが意味しているのは、心に浮かぶがままに自然に引き出される概念のこと。心の中に見られる自然な形をした概念と、言葉によって人工的に表現される概念とは、明白な区別がある。

126 『アエネーイス』第6歌 129行。

127 原語は **Margent** “margin” 本の頁の余白。そこへ書き込みをする。当時は、紙が貴重であったので、余白を残さないほど、詳細な書き込みがなされた。

128 原語は **Aloes, Rhubarbarus** 前者はろかい (aloe) の汁。下剤などに用いられるが、苦い。後者は **rhubarb** (だいおう)。その根は下剤や苦味薬として用いられる。

揺籠ゆりかごとするまで変わらない)、ヘラクレス¹²⁹、アキレス、キュロス、アエネーアスの物語は喜んで聞き耳を立てるであろう。彼らの物語を聞いている間に、必ずや、叡智、武勇、正義についての正しい描写を聞くことになり、もしそれらが赤裸々な形のまま、すなわち、哲学的に述べられたとすれば、学校に逆戻りしたとさんざん愚痴を言い立てるであろう。

詩がその一部をなす模倣行為は、他の何にもまして自然への最高の適応性に恵まれている。アリストテレスが述べている通り¹³⁰、例えば、残忍な戦闘行為、この世のものならぬ怪物など、本来は恐ろしいものも、詩に描いて模倣されると、悦ばしいものになるからだ。実際に、『アマデイス・デ・ガウラ』¹³¹を読んだだけで（この作品は、実をいうと、完璧な詩にはまったく届かないものだが）、知らず知らずに心を動かされて、礼儀、寛容、とりわけ、剛毅の行為を実践したいという思いに駆り立てられた人々を、私は知っている。老アンキセスを背負って落城のトロイを脱出するアエネーアスの忠孝を読んで、そのような卓抜な行為をする運命に巡り合いたいと願わない者がいるであろうか。トゥルヌス¹³²の言葉に（トゥルヌスが想像の中で己の彫像を建てたという話だが）、心を動かされない者がいるであろうか。

この地に、逃亡するトゥルヌスの姿を見せることになるのか。
死ぬことは、それほどまでに恐ろしいことなのか。

しかるに、哲学者たちは、楽しませることを軽蔑するあまり、人の心を少しも動かすことに満足せず、男らしさが主要なあるいは唯一の善であるとか、

129 ヘラクレス **Hercules** 大力、剛毅、人情味をもって知られるギリシア神話中の英雄。ネメアのライオン退治、レルネの沼の水蛇ヒュドラ退治など、神々の王妃ヘラによって彼に課せられた12の難行の話は有名。

130 アリストテレス『詩学』第4章、次の言葉を参照。「さらに人は、誰でもまね（描写）された結果を喜ぶということ、これもまた人間に備わる自然の本能である。経験的事実がそのことを証明する。なぜなら、われわれは、実物を目にするのが厭わしいものであっても、それをこの上なく正確に写した似姿を見ることを、喜ぶのである。たとえば、最下等の動物や人間の死体の形態について、そのようなことが言える。」（藤沢令夫訳）

131 『ガリアのアマデイス』 *Amadis de Gaule* スペインあるいはポルトガルの騎士物語で、16世紀初めにモンタルヴォ *Garcia de Montalvo* がスペイン語で語ったものが有名になり、フランス語や英語にも訳された。ガリア *Gaul* の王ペリオン *Perion* とブルターニュの王女エリセナ *Elisena* との不義の子アマデイス *Amadis* による冒険と武勇と恋の物語。彼は幼い頃捨てられたが、スコットランドの宮廷で養育され、立派な騎士となり、イングランドの王女オリアナ *Oriana* と結婚、様々な手柄を立て、鎧を着て、ガリアに帰る。恋した相手の女性に忠誠を尽くす騎士の典型。

132 トゥルヌス **Turnus** 『アエネーイス』に出るルチュリア *Rutulia* の王で、熱血漢。アエネーアスがラティウム *Latium* を征服したとき、その国の王ラティヌス *Latinus* は彼の娘ラヴィニア *Lavinia* をアエネーアスに与えた。しかし、ラヴィニアの許婚者であったトゥルヌスはこの処置に

瞑想的な生活と行動的な生活のどちらが優れているかなどと、ただいがみ合っているだけだ。そのことを、プラトンもボエティウス¹³³もよく存じており、それゆえに、二人は、哲学の御令嬢に詩という仮面^{かりそめ}となる衣装を非常にしばしば借り着させたのである。美徳など学校で習う仮初のもと考え、「自然の欲に従うこと¹³⁴」の他に善を知らず、従って、哲学者の厳格な説論を鼻であしらい、それらがよって立つ内なる理性を感じる事が無い、そういう冷酷非情な悪人でさえ、喜ばしてもらうことに不服はないのである。楽しませるといふ仕事は、詩人といういい奴がすると約束しているらしい。そうして、知らぬ間に、善の美姿をこっそりと盗み見てしまい（見てしまえば、愛さざるを得ないので）、さながらサクランボの甘い菓を飲むことになるのである。

この詩的創意の不思議な効果を実証するには、無数の例を挙げる事ができるであろう。取り敢えずは、二つだけに留めるが、しばしば引き合いに出されるので、だれもがよく知っていると思われる。一つはメネニウス・アグリッパ¹³⁵に関わるものである。ローマの全民衆が決然として元老院と袂を分かち、明らかな大壊滅の様相を呈した時のこと、アグリッパは、当時としては卓越した雄弁家であったにもかかわらず、民衆の中に遣って来たときに彼が頼みとしたものは、比喩を凝らした言辞でも、巧妙なご機嫌取りでも、ましてや哲学の持って回った処世訓でもなく、（もしそれがプラトンの如くであれば取り分けて¹³⁶）、民衆がそれを理解するには先ずもって幾何学を修めなければならないような、そんなものを携えて現れたのではない。そうでは

反対し、アエネアスに挑戦し、勇敢に戦って死ぬ。

133 ボエティウス **Boethius** (480?-524) 後期ローマの哲学者・神学者・政治家。名家に生まれて東ゴート王テオドリクス **Theodoric** に仕え、510年に執政官になったが、東ローマ帝国皇帝と通じたと疑われた元老の弁護をしたため、彼も大逆の嫌疑を受けて投獄され、拷問されて死んだ。彼が獄中で書いたのが、新プラトン派の影響の下に神と人間についての考察を深めた『哲学の慰めについて』*De Consolatione Philosophiae* である。5巻の散文であるが、諸所に詩を交えている。悪が栄え、善が減びるかに見えるこの世のありさまを知って懐疑的になった獄中の作者は、彼を訪れた「哲学」によって迷いを解かれ、神の正しさを悟るというのがこの書の骨子。中世においてもっとも愛読された書物の一つ。英国では、アルフレッド **Alfred** 大王の訳があり、のちにはチョーサーやエリザベス一世もこれを訳している。

134 原文は **Indulgere genio** “to indulge one’s inclinations” (ペルシウス **Persius** 『諷刺詩』 *Satires*, V, 151)。ペルシウス (34-62) は、ローマのストア学派の詩人。ローマ社会の頹廢を糾弾する6篇の風刺詩を残している。

135 アグリッパ **Menenius Agrippa** 初期ローマの政治家。503B.C.に執政官であった。胃腸とその他の身体各部とのたとえ話を用いて、貴族への不満からローマを離脱した平民たちを説得し、彼らをふたたびローマに復帰させることに成功したのは493B.C.のことである。なお、彼のたとえ話は、シェイクスピアも『コリオリナス』 *Coriolanus* の中で用いている。

136 プラトンのアカデメイア学園 **Academy** の入口には、「幾何学を知らざる者は入るべからず」

なく、実のところ、彼は飾らない気の置けない詩人のように振る舞う。彼は民衆に一つのとえ話をする。その昔、肉体のあらゆる部分が腹に対して反乱の陰謀を企てた。腹は各部分の労働の果実を貪り食らう奴だと思われた。彼らは、そのように役にも立たず浪費ばかりする奴は飢え死にさせてしまえという結論に達した。要するに、短くまとめると（この話はよく知られていて、ただのお話であることも同じくよく知られているので）、彼らは腹を罰することによって、おのれを苦しめることになった。現在のローマの状況に応用された彼の話は、言葉だけで産み出したのを私が他には読んだことがないほどの目覚ましい効果を民衆の中に作り出し、実に突然に、実に好ましい変化を生じさせた。まもなく、理屈に合った条件に立って、完全な和解が成立したのである。

もう一つは、預言者ナタン¹³⁷の例である。ナタンは、聖王ダビデが姦通の罪に殺人を重ねて強固にするほどまでに神を捨て去ったとき、ダビデの恥を本人の眼前に晒すという、友人としての最も心を遣う勤めを果たすべき時に、それほどに選ばれた神の下僕であるダビデを神の身許に呼び戻すため神によって遣わされて、どのようにしてそれを行ったのか。大切な子羊が恩知らずにもその懐から奪い取られた人の話を措いて他にない。その応用された意味は神々しいまでに真実だが、話の内容それ自体は、作り物である。ところがこの話は、ダビデに（私は、たとえ話という二次的で手段的な原因を述べている¹³⁸）さながら鏡の中におのれの穢れを見る思いをさせた。神の憐れみを乞うあの天上的な詩篇がよく証言している通りである。

従って、これらの実例や論証によって、詩人は悦びを授けると同じ手で、他の学芸には及ばないほど効果的に人の心を引き寄せるということは明白であろうと思われる。こうして、次に続く結論は、あながち不適當ではない。美德は、この世のあらゆる学問が目的（終点）とすべき最高の卓越した休息所であり、詩は、美德を教えるものとして最も親しみやすく、それを目指して人心を動かす最高の王者であるから、最高に卓越した仕事における最高に卓越した仕事師なのである。

と書いてあったと言う。

137 ナタン Nathan 旧約聖書に出るヘブライの予言者。ヘテ人の軍人、バテシバ Bathsheba の夫でダビデの部下であったウリアダビデの策謀によって戦死を逃げ、バテシバはダビデの妻となり、ソロモンを産むことになる。シドニーがここに述べているナタンがダビデを非難したという話については、「サミュエル記下」11-12章 2 Samuel に見られる。

138 たとえ話は、第二次的な原因であり、第一の根源的原因は God にあると、シドニーは言いたいのである。